

第 29 期日本ロシア学生交流会
関東本部報告書

挨拶

日本ロシア学生交流会は27年前の1989年に発足して以来、「ロシア」を軸として多様な活動を行ってまいりました。特に毎年夏季休暇中に行われる、ロシア人学生を日本に招待する訪日企画、および日本人学生をロシアでホームステイとして受け入れてもらう訪口企画は弊団体の中心企画として、毎年多くの学生の参加を受けております。今年は6名をリャザンより受け入れ、10名をノヴォシビルスクへと送り出しました。両企画とも無事に終わり、ロシア、日本両国の参加者にとって実り多いものとなりました。支えてくださった会員の皆様、助成金など様々な面で支援してくださった全ての方に深くお礼申し上げます。

長らく「近くて遠い国」と言われてきたロシアですが、近年、特に今年に入ってから日ロ関係は急展開を見せております。安部首相とプーチン大統領の個人的な関係の親密さはしばしば報じられていましたが、9月にはロシア経済協力大臣が創設され、また12月上旬にはプーチン大統領のおよそ7年ぶりの来日も予定されるなど、多くの動きが現れております。長引く北方領土問題やウクライナ危機、ソ連時代のイメージなどからか、ロシアに対する印象は一般的に良いとは言えません。日ロ関係の進展が期待される中、弊団体の活動を通してロシアに対する理解を深め、捉え直す事は非常に有意義な事であると考えられます。実際にロシアの地を踏む訪口企画では、地元の方と生活を共にすることでロシア人の感性を肌で感じ、ロシアを受け入れて日本を紹介する訪日企画では、日本の文化、慣習について考え直すことができます。訪日、訪口企画以外でも、観光案内やディスカッション、研究会や料理会、OB・OGの方の留学体験談など、ロシアに興味のある学生にとって魅力的な機会が多くあります。こうした経験が、各自が興味のあるロシアに対してどう向き合うかの契機となり、ひいては日ロ関係の進展に繋がるものだと信じております。

加えて、これらの催しを企画して実行するという事には、計画性や発想力、コミュニケーションなどが必要とされ、日ロの外へ出ても意義深いものであると考えております。そして何よりも重要であるのが、全ての企画の根幹をなす人同士の繋がりであると考えております。例えば訪日、訪口企画では提携都市のロシア人との信頼関係、財団のご支援、ホームステイを精力的に受け入れてくれる会員とご家族、そして参加者の全員が繋がって、一つの企画を織りなしております。日ロの企画はどれ一つをとっても、参加者、企画者、支援者の方々の協力なくしては成り立たないものです。弊交流会ではこれからも、人同士の繋がりが大切にされることを願います。

最後に、本交流会の企画を支えてくださっている財団の皆様、企画に参加してくださった全ての皆様に、今一度深く感謝申し上げます。

日本ロシア学生交流会関東本部幹事長
東京大学2年 中山義裕

ロシアは日本にとって最も近いヨーロッパ世界である。ロシア人は、その相貌体格から見れば紛れもないコーカソイドが多く、モスクワ、ペテルブルグのみならず、各地の大都市に残された帝政ロシア時代以来の宮殿や美術館などは、ヨーロッパ文化そのものに思われる。

しかし、おそらくそれは、ピョートル大帝による急速な西欧化・近代化政策によって、上層社会のみが部分的にそのような装いをこらしただけなのかもしれない。

実際にロシア文化に触れると、そのことが強く感じられる。例えばドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の主要登場人物の一人、ゾシマ長老の自然観を見てみよう。

「草の一本、小さな甲虫、蟻ん子、黄金色の蜜蜂一匹も神様の神秘を証している。（…）神の言はあらゆるものためにあり、全ての被造物、生きとし生けるものは、葉っぱの一枚に至るまで言を志向し、神の栄光を謳い、キリストに対して涙を流している」

一木一草が神に祈りを奉げており、その美を通して人間が神の神秘を知る、というゾシマのこの言葉には、人間中心主義、主知主義が主流の西欧のキリスト教徒は違和感を覚えるだろう。寧ろ、ゾシマの言葉は、私たち東洋人が親しんでいる「山川草木悉有仏性」に隣接するものだと言っていいほどである。

無論、ロシア正教（東方キリスト教）でも、神は超越的存在であり、その「本質」は、被造物たる人間には与り得ぬものとされているが、正教には、神の「本質」と「働き」を区別する考え方がある。「働き」は太陽から派出する光線のように、万物にあまねく浸透し働きかけ、これを暖かく支えているというわけだ。これは、自然そのものを神とみなす「汎神論」ではなく、万物は神の内にあるとみなす「汎在神論」であると考えられる。しかし、両者はたしかに一線を画すものの、そこには一定の類似性も感じられるのである。

1917年革命の後、ボリシェヴィキ政権に反対して多くのロシア人が国外に亡命した。西欧に亡命した若い学者たちの中から1920年代にユーラシア主義が生まれた。彼らは、東と西を有機的に繋ぐ歴史的統一体としてのロシアの役割を見直し、従来とは異なる歴史観、国家構想などを提示したのだが、彼らの思想の根源となったのが、たとえば先に述べたロシア正教のもつ、東と西の間にあるような特性であったと考えられる。

ユーラシア主義は、ソ連邦崩壊後、再び注目されるようになり、現代ロシアでも多少形を変えて政治思想として受け継がれている。政治思想・運動としてのユーラシア主義の是非はともかくとして、実際にロシア人と交流すると、私たちは、思いのほか強く自他の近親性を感じずにはいられない。

ロシアは多様性がその特徴の一つである。民族もコーカソイドのみならず、私たち日本人にそっくりの人たちもおり、宗教も先に述べたロシア正教に尽きるものではない。私たちがロシアと出会うとき抱く思いがけぬほどの親近感、ロシアが西から東へと広大な地続きの大陸を繋いでゆく中で形成している多様性ゆえのものかもしれない。

ではロシアは日本に対して、いかなるイメージを抱いているのか——それについては、ロシアの文学者、ジャーナリスト、外交官、政治家たちが記述したものなど、膨大な蓄積がある。ユニークな資料としては、神田のニコライ堂を築いた聖ニコライの日記も貴重なものであろう。

それらの資料が重要であることは間違いないが、若い日ロの学生が、直接出会い、交流することは、日ロ両国の相互理解のために、何にも増して意義深い体験である。最近の学生は、ロシア語を履修する動機として、ロシアの文化、芸術、歴史、政治ばかりでなく、宇宙工学を中心としたロシアの科学技術に着目する者も多い。近い将来の日ロ両国の文化のみならず経済や科学技術の分野での協力のためにも、日ロ学生交流会の果たす役割は、限りなく大きいものであると、私は確信している。

目次

第1章 日本ロシア学生交流会について

1. 1	概要.....	2
1. 2	関東本部について.....	4
1. 3	これまでの主な活動.....	4
1. 4	今年度の活動.....	6

第2章 訪日企画

2. 1	訪日企画について.....	8
2. 2	ディスカッション.....	14
2. 3	滞在記録.....	24
2. 4	全体感想.....	30

第3章 訪口企画

3. 1	訪日企画について.....	42
3. 2	滞在記録.....	47
3. 3	全体感想.....	56

補足 関西本部の活動

第1章 日本ロシア学生交流会について

1. 1 概要

1989年、ソ連を含む東欧諸国は激動の年であった。現地への渡航もままならない中、ソ連に赴き現地で同世代の学生たちと直接ひざを付き合わせて語り合おうと考えた学生有志がいた。彼らは同年6月、当会の前身となる「日ソ学生交流会」を設立した。当時はソ連に関する正確な報道も少なく絶対的な情報量が不足していたが、得られた僅かな情報を元にして毎週のように「ソ連とは、新生ロシアとは何か」と熱い議論を交わしていた。

当初2年間はモスクワを訪問し、とにかく現地の学生との対話をしようという意気込みの元に活動していたが、ソ連・ロシア激動の時代で交流先を見つけることすら困難だった。そのような中、財団からの助成金が一時打ち切られ、やむなく自費でモスクワへの渡航が2度実施された。格安航空券の無いこの時代に「学生が自費で」渡航するのに必要な資金集めに際しては、想像を絶する苦労があった。

1994年、厳しい状況が続く中、会員のカンパによって第1回訪日企画が敢行され、モスクワから1名の学生を招致することができた。

1995年は、当会にとって大きな転機の年になった。シベリア地域最大の都市にして、ロシア第三の都市、ノヴォシビルスク市の学生と新たに定期的な交流事業が開始される運びとなったのである。ノヴォシビルスクには日本語を教えている高等教育機関が複数あるが、当時は主にノヴォシビルスク国立大学の東洋学部との交流を継続的に実施した。ここで、ノヴォシビルスクと当会の交友関係にいたる経緯も大変興味深く特筆に値する。1995年当時に当会の顧問を務めてくださった和田氏とフロロヴァ女史との出会いである。

和田氏は、第二次世界大戦で強力な軍勢力を誇ったソ連に鮮烈な印象を抱いたことからロシアに関心をもっていた。そこで、長年に渡る金融マンとしての職業人生を引退された後は精力的にロシアの大学を回って日本語学習の指導をなさっていた。また、自ら多くの在日ロシア人留学生の身元保証人として活動されるなど、日ロ両国の架け橋になろうとご尽力なさった方でもあった。

あるとき同氏がノヴォシビルスクを訪ねた際、当時日本との交流が皆無に近かった同地で日本語を教えている教授がいると知った。その教授こそがフロロヴァ女史である。彼女はソ連邦成立直後の幼少時代に中国東北部へ亡命し、「満州国」に成り代わった同地の日本人学校に入学した。その後、高等女子学校まで日本語による教育を受け、フルシチョフ時代のソ連に帰国して大学で教鞭をとった。フロロヴァ女史の半生には常に戦争がついてまわった。

和田氏とフロロヴァ女史は、戦争の記憶という共通項で結ばれて意気投合し、両氏が仲立ちとなって日ロ間学生交流の芽を育もうということで見解の一致を見た。当時フロロヴァ女史の勤務していたノヴォシビルスク国立大学に本会の姉妹サークルとして「東洋クラブ」を結成し、万全の受け入れ態勢が整ったところで第1回ノヴォシビルスク訪問事業が実行された。それまで一貫してきた「ホーム・メイド」の交流活動をモットーとして継続し、当会の活動を重ねた。

1996、97年は春先、桜の蕾がほころぶころに訪日企画を実施し、思い出作りには絶好の企画となった。築地の魚市場を訪れて市場関係者に突撃インタビューを試みたり、レンタカーを借りて富士山に登ったりと、バリエーションと新鮮さに富んだ活動を行った。日本の家庭を知ってもらうことを目的としたホームステイ事業を本格的に始めたのもこの頃である。訪日企画に際してはロシア側と「財団の助成金に関する覚書」に署名・調

印を行うなど、組織としての関係強化について協議が重ねられた。また、失敗に終わってしまったが、ロシア極東地域のブリヤート共和国にあるウラン・ウデ国立大学との交流開始を模索した年でもあった。

1998年からはそれまで2期に渡って同年中に行なっていた訪日・訪口企画について、主に財政的理由からそれぞれ隔年開催とすることに決定した。当時の基本的な方針としては、訪日・訪口企画を隔年開催にする代わりに1回ごとの交流事業の規模を拡大し、ロシア側との間にこれまでと同等の交流密度を維持していく、というものであった。その具体的な表れとして、当会会員の実家に出向く「地方企画」など新企画が次々と打ち出された。訪口事業においても同様の路線がとられた。

1999年には新しい試みとしてモスクワ再訪問を行い、現地の学生(プレハーノフ記念経済大学内の国際学生交流サークルであるIAESTEのメンバー)との交流が再開した。

2001年の夏よりモスクワ郊外の街リヤザンとの交流が開始された。ノヴォシビルスクとの交流も現地メンバーが大きく入れ替わり、さらに活動は充実した。

2009年、本会は前身の日ソ学生交流会時代も含め20周年を迎えた。この間当会からは長峯誠参議院議員をはじめとして広く社会で活躍する人材を多数輩出している。

2011年の春には嘗てから望んでいた関西本部を設立した。大阪大学・同志社大学の学生を主な会員としている。同年8月にはリヤザンから4名を関西に招致して10日間の訪日企画を行った。同時に訪口企画も行なったため、1997年を最後に途絶えていた訪日・訪口企画の同時開催を果たす運びとなった。

2012年は関東関西2本部体制の中で4都市間同時交流という新しい試みを始めた。関東からノヴォシビルスクへ、関西からリヤザンへ、また、ノヴォシビルスクから関西へ、リヤザンから関東へ、と2つずつの訪日・訪口企画が実施された。この試みは現在も続けられている。

2013年3月には『日ロ学生シンポジウム』を行った。外部の方々を招いての斬新かつ大規模な企画を皮切りに、北方四島学生交流企画への参加など多岐に渡って活動が実施された。新会員を迎え会員数は関東本部だけでも50名にまで膨らみ、本会は量、質ともに飛躍的に発展を遂げる年となった。

2014年では新たな試みとして東京大学の学園祭である駒場祭での出店を行ったことで、本会の活動・ロシアのことに一般の人に広く知ってもらうきっかけとなった。

2015、16年には会員数が増加、これまでの主な参加大学である東京大学、東京外国語大学、上智大学に加え、慶應義塾大学や東京理科大学、法政大学など様々な大学から会員が集まるようになり、活動に活気が生まれた。

1. 2 関東本部について

関東本部は1989年に設立された日ソ学生交流会を前身として、現在に至るまでノヴォシビルスク・リャザンとの学生間交流を中心とした活動を行ってきた。近年は訪日・訪口企画以外にも、北方領土を訪問するビザなし交流への参加、駒場祭への出店など活動は多岐にわたっている。会員の中心メンバーは上智大学・東京大学・東京外国語大学の学部1、2年生だが、OB・OGの方々の努力もあり、早稲田大学・慶應義塾大学など様々な大学から参加を受けている。会員はロシア語が専攻・第二外国語の学生に限らず、ロシアやその周辺地域への関心、学生交流への興味などで当団体に入る者も多くなっている。また、今年度はOB・OGの活動への参加も積極的に受け入れた。ロシアについてのみならず団体活動に関する知識、経験に富んだOB・OGの参加は心強く、来年度もこの姿勢は継続することが見込まれる。

1. 3 これまでの主な活動

1989年6月	日ソ学生交流会結成	
1990年8月	第1回訪ソ企画	日本人13名をモスクワへ派遣
1992年8月	第2回訪ソ企画	日本人13名をモスクワへ派遣
1993年7,8月	第3回訪口企画	日本人をモスクワ・極東へ派遣
1994年	第4回訪口企画	日本人をモスクワ・極東へ派遣
	第1回訪日企画	ロシア人1名をモスクワから招致
1995年8,9月	第5回訪口企画	日本人7名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
1996年3月	第2回訪日企画	ロシア人学生8名・教師1名をノヴォシビルスクから招致
8,9月	第6回訪口企画	日本人10名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
1997年3月	第3回訪日企画	ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
8,9月	第7回訪口企画	日本人8名をノヴォシビルスクへ派遣
1998年8月	第4回訪日企画	ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
1999年8,9月	第8回訪口企画	日本人16名をモスクワ・ノヴォシビルスクへ派遣
2000年8月	第5回訪日企画	ロシア人9名をノヴォシビルスクから招致
2001年8月	第9回訪口企画	日本人10名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
2002年8月	第6回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから7名、リャザンから5名招致
2003年8月	第10回訪口企画	日本人13名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
2004年8月	第7回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから6名、リャザンから3名招致
2005年8月	第11回訪口企画	日本人10名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
2006年8月	第8回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから5名、リャザンから9名招致
2007年8月	第12回訪口企画	日本人7名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
2008年8月	第9回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから3名、リャザンから10名招致
2009年8月	第13回訪口企画	日本人13名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣

2010年8月	第10回訪日企画	ロシア人をノヴォシビルスクから7名、リャザンから7名招致
2011年5月	日本ロシア学生交流会関西本部発足	
8月	第14回関東本部主催訪日企画	日本人14名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
2012年8月	第11回関東本部主催訪日企画	ロシア人10名をリャザンから招致
	第15回関東本部主催訪日企画	日本人5名をノヴォシビルスクへ派遣
2013年8月	第12回関東本部主催訪日企画	ロシア人8名をノヴォシビルスクから招致
	第16回関東本部主催訪日企画	日本人10名をリャザンへ派遣
2014年8月	第13回関東本部主催訪日企画	ロシア人9名をリャザンから招致
	第17回関東本部主催訪日企画	日本人10名をノヴォシビルスクへ派遣
2015年8月	第14回関東本部主催訪日企画	ロシア人6名をノヴォシビルスクから招致
	第18回関東本部主催訪日企画	日本人8名をリャザンへ派遣
2016年8月	第15回関東本部主催訪日企画	ロシア人6名をリャザンから招致
	第19回関東本部主催訪日企画	日本人10名をノヴォシビルスクへ派遣

1. 4 今年度の活動

1. 4. 1 活動報告

本年度は前年度に引き続き、訪日・訪ロ企画以外の活動も拡充し内部の結束・交流を強化することと同時に、活動の発信を通じてより多くの人に興味を持ってもらうことを目指してきた。前者については、8月の訪日・訪ロ事業を中心として、日露青年交流会事業での都内散策、10月の他ロシア系サークルと合同でのフォーラム開催、11月の駒場祭への出店、さらに冬季休業中に予定されている関西支部との勉強合宿など、悪天候により中止となってしまった5月の北方領土交流事業および8月の択捉島、国後島の訪問事業を埋めるべく、活動の拡充を図ってきた。後者については、従来のホームページに加えて SNS を通じた活動の広報も精力的に行った。

平常活動では例年度と同様に月2回のペースを基本とした定例会、研究部を中心とした勉強会を行いつつ、ロシア料理会など新たな試みも実施された。会員については先代までの努力もあり、新歓に来てくれた1年生の人数、出身大学の数ともに増加した。財政面では前年度の提言を踏まえた企画の迅速化、そして平和中島財団からのさらなるご支援によって、訪日・訪ロ企画に余裕をもって資金を供給することができた。

1. 4. 2 今後の展望

本年度も昨年度同様、さらに会員数や参加大学の数も増加したために意見や趣向が多様化し、研究会のテーマや活動内容そのものが多様化した。彼らの幅広い需要に応えるべく都度活動を企画、実施した。このように当団体においては訪日・訪ロの基幹事業以外は毎年柔軟性を持って企画がされているが、本年度においてはその弊害が出てしてしまった部分があった。すなわち、5月の北方領土交流受入事業が中止された際に、会員に十分な機会を提供できない期間があった。

後期活動ではこの反省を踏まえ、他学生団体と合同でのフォーラムの開催や、関西支部との勉強合宿を企画し、会員に十分な機会を提供できるように努めた。来年度以降もこれらを実施し、継続する事業の数を増やすことで、さらに安定してロシアと関われる機会を提供できるようになれば望ましい。

また外部団体との関係については引き続き良好な関係を保つことができた。外部団体の方々には今年度も多くの機会を提供していただいた。オープンで積極的な対外姿勢を重視している当団体としては、現在お世話になっている団体に加え、新たな団体とも協力も模索していき、互恵的な関係を築いていきたい。

(文責：幹事長 中山義裕)

第 2 章 訪日企画

2. 1 訪日企画について

2. 1. 1 企画概要

企画名	第29回日本ロシア学生交流企画 —第15回関東本部主催訪日企画	
主催	日本ロシア学生交流会 関東本部	
共催	日本ロシア学生交流会 リヤザン支部	
助成	公益財団法人 平和中島財団	
実施期間	2016年8月3日～8月13日	
参加人数	関東本部	36名
	リヤザン支部	6名

2. 1. 2 主な企画内容

●ホームステイ

ロシア人メンバーは日本人メンバーの家庭にホームステイをした。今回初めて日本を訪れるというロシア人も多く、日本の生活を新鮮なものに感じたことだろう。また、日本人にとってもロシア人と生活を共にすることで生活様式の違いを発見することができる良い機会となった。

●ディスカッション

訪日企画中、2日間に分けてディスカッションが行われた。議題についての文化紹介に基づき意見交換を行った。ディスカッションを行うことで、普段勉強しているだけでは知り得ない日ロ双方の実情を理解することができた。

●都市散策・交流企画

日本の古風な雰囲気が漂う浅草や鎌倉に加え、現代的な観光地である東京ソラマチや秋葉原を散策した。歴史や文化など日本の様々な側面を垣間見ることができる機会となった。

また、日々の企画を通じて相互に理解を深めることができた。日本人とロシア人が初めて出会ったウェルカムパーティーの際は緊張からかあまり会話が少なかったとはいえませんが、日を追うごとに親睦が深まっていき、交流も充実したものになっていった。

●報告書の発行

様々な企画の内容や日本とロシアの学生による交流を通して得たものをまとめ、本会の活動意義について報告するため、本報告書を編纂する。

2. 1. 3 交流都市紹介

今回の訪日企画で招致したのはリャザンのロシア人学生・教師である。

リャザンはリャザン州の州都である。面積は約224km²で、モスクワの南東150～200km、オカ川とトルベジ川が合流する地点に位置している。平均気温は夏で19℃、冬で-11℃となっている。人口は約53万人であるが、近年は高齢化が進んでいることから人口は減少している。鉄道や幹線道の交差点、空港、河港が存在することから交通の要衝となっている。

リャザンの起源は年代記の1031年に記載されているリャザン公国のペレヤスラヴリリャザンスキーという街である。商業・軍事の中心都市から13世紀末には州都となった。1521年にモスクワ公国に併合されてからは18世紀までモスクワ南東の防衛拠点となったのち、1778年にリャザンと改名された。

19世紀中頃までリャザンは行政、商業が中心であり工業部門の発展は僅かであった。しかし、19世紀末に鉄道が敷設されて交通の中心地となったことで工業部門も発展し、多くの工場が建設された。ソ連時代の5カ年計画によっても発展は進められ、現在でも機械、石油加工などが盛んな工業都市となっている。

リャザンは行政、文化、交通の中心であり、ラジオ技術、農業、教育、医科のような大学や研究所、劇場、博物館がある。旧市街には1059年建造のクレムリンのある地区に修道院や教会など数々の建造物が保存されている。

市街は1780～82年の総合計画で格子状に整備され、その後1968年の総合計画で住宅群や行政・社会施設が建設された。



《参考文献》

竹内啓一ほか編 (2016) 『世界地名大辞典6 ヨーロッパ・ロシアⅢ』 朝倉書店

Официальный сайт Администрации города Рязани (2016) 『Город Рязань』

<<http://admrzn.ru/gorod-ryazan>> 2016年9月19日閲覧

『Общие сведения』

<<http://admrzn.ru/gorod-ryazan/obshie-svedeniya>> 2016年9月19日閲覧

2. 1. 4 プログラム日程

8月 3日 (水)	23:15	ロシア人メンバー 羽田空港着
4日 (木)	16:30	葛西臨海公園駅集合
	17:30	ウェルカムパーティー
	21:00	解散
5日 (金)		ファミリーデー
6日 (土)		ファミリーデー
7日 (日)	9:45	上智大学集合
	10:30	ディスカッション
	14:00	昼食、浅草散策
	16:00	東京ソラマチ散策
	17:00	解散
8日 (月)	10:45	東京大学駒場キャンパス集合
	11:30	ディスカッション
	13:55	昼食
	15:15	ボウリング
	17:00	解散
9日 (火)	10:00	秋葉原駅集合
	10:30	秋葉原散策
	15:00	カラオケ
	17:00	解散
10日 (水)	11:00	川越駅集合
	12:00	氷川神社見学
	13:40	昼食
	14:30	川越小江戸散策
	18:30	解散
11日 (木)	10:00	藤沢駅集合
	11:00	高德院見学
	12:30	昼食、鎌倉散策
	14:30	腰越海岸
	18:00	夕食
	19:30	解散
12日 (金)	17:30	四谷三丁目駅集合
	18:00	フェアウェルパーティー
	20:30	解散

13日(土)	19:00	羽田空港国際線ターミナル集合
	20:15	夕食
	23:20	解散
	24:30	ロシア人メンバー 日本出国

2. 1. 5 参加者一覧

●関東本部

氏名	大学	学年	氏名	大学	学年
李優大	東京大学	4年	古川怜雄	上智大学	2年
小堀航己	東京大学	3年	弓取奨平	上智大学	2年
石田茂年	上智大学	3年	立古譲治	上智大学	2年
清水真伍	上智大学	3年	鈴木陽介	法政大学	2年
緒方美友	東京理科大学	3年	南谷成貴	法政大学	2年
稲永真守梨	東京大学	2年	勝田真凜	東京大学	1年
宇野真佑子	東京大学	2年	水田隆介	東京大学	1年
楠秀大	東京大学	2年	塩田皐月	東京外国語大学	1年
中山義裕	東京大学	2年	柳沢桃子	東京外国語大学	1年
阿部有希子	横浜国立大学	2年	菅原義剛	慶應義塾大学	1年
唐牛健成	早稲田大学	2年	伊賀慎太郎	上智大学	1年
蓮田柚香	慶應義塾大学	2年	石井廉史郎	上智大学	1年
石川智也	上智大学	2年	高柳りさ	上智大学	1年
市川龍星	上智大学	2年	田原歩実	上智大学	1年
小林野愛	上智大学	2年	野々村樹	東京理科大学	1年
小山功起	上智大学	2年	須藤瞳	津田塾大学	1年
尻無濱優香	上智大学	2年	西村奈那子	津田塾大学	1年
諏訪一功	上智大学	2年	青山柚芽	獨協大学	1年

●リヤザン支部

氏名	大学	受け入れ
Kirilina Viktoriya	リヤザン国立大学	菅原義剛
Dashkova Tanya	リヤザン国立大学	稲永真守梨
Kolobonova Lena	リヤザン国立大学	柳沢桃子
Umarova Angelina	リヤザン国立無線工学大学	塩田皐月
Sinev Roman	リヤザン国立無線工学大学(准教授)	諏訪一功
Gasko Aleksei	リヤザン国立無線工学大学(上級講師)	立古譲治

2. 1. 6 会計報告

●収入

項目	小計[円]
助成金	380,870
合計	380,870

●支出

日付	項目	内訳(単価) [円]	人数 [人]	小計 [円]	備考
7月8日	ビザ申請書類送料			12,300	
8月4日	ウェルカムパーティー代 (夕食代込)	3,000	6	18,000	
8月7日	交通費 (四谷-浅草)	200	6	1,200	
	交通費 (浅草-東京スカイツリー)	150	6	900	
	交通費 (東京スカイツリー-上野)	310	5	1,550	
8月8日	ボウリング代	1,400	6	8,400	
8月9日	カラオケ代	1,600	6	9,600	
8月10日	1日バス乗車券	300	6	1,800	
8月11日	江ノ電 乗り放題	600	6	3,600	
	高德院 拝観料	200	6	1,200	
8月12日	ジブリ大博覧会 入場料	1,200	5	6,000	
	ナンジャタウン 入場料	500	5	2,500	
	フェアウェルパーティー代 (夕食代込)	3,300	6	19,800	
8月4日 ~8月13日	ホームステイ支援費	2,5000	6	150,000	朝食：¥500 10日分 昼食：¥1,000 10日分 夕食：¥1,000 8日分 ファミリーデー：¥1000 2日分
8月4日 ~8月13日	交通費			84,020	
	訪日受け入れ者への支援	10,000	6	60,000	
合計[円]				380,870	

(文責：会計 笠原大生)

2. 2 ディスカッション

2. 2. 1 ファッション

●文化紹介—伊賀慎太朗

《ロシア語》

Здравствуйте. Я буду представить о моде одежды, и обуви, которые были популярны среди хулиганов. Я выбрал тему о моде хулиганов, потому что их моды оказали большие влияния на моду для молодёжи.

Сначала я хочу ознакомить вас с русской модой одежды среди хулиганов. В 1940-ых годах, после второй мировой войны, среди хулиганов были популярны такие вещи: например, плоские колпаки, короткие ботинки, золотые зубы. Такой стиль появился и стал модным среди бедных людей и молодых хулиганов. Но через некоторое время молодые из богатых семей тоже стали одеты в таком же стиле. Потом в 1990-ых годах появилась много шайк, и началось новое течение моды. Бандиты часто показывали свой статус в одежде и носили большие аксессуары. Босс обычно был одет в красном костюме. Даже обычные бандиты старались надеть дорогие одежды и аксессуары. Они особенно любили носить толстые, золотые или серебристые кольца-цепь. А были люди, которых назывались «быки». У них телах сделали клейма. Их работой являлась борьба. «Быки» в серебристых аксессуарах, носили джерси-куртки – смотрятся крутыми вот так и этот хулиганский стиль подражали и стал популярным. «Гопники» или «гопота» - люди так называются об этом стиле. Но сегодняшние «быки» предпочитают кожаные куртки, а типичные «гопники» ещё носят в и обуви много людей среди них носят джерси Adidas.

Итак, теперь о истории моды японских хулиганов. В Японии современная мода среди хулиганов - стиль «банкара», появился в 1990-ых. Во время войны, все надевали изношенные подержанные одежды и в одежде они доказывали свою честность, скромность и уважение солдатам. Однако после второй мировой войны, хотя там уже появились достаточно качественные одежды, многие люди остались одеты повреждёнными одеждой. Оказалось, тогда была мода надеть таких подержанных одежды. Итак, следующая мода была насчет форменная одежда для мужских школьников. Как изменился стиль? В то время у униформы были очень длинные или короткие подоли, но блоки были очень широки. Они были похожи на шаровары. Такой стиль одежды был популярен с 1970-ых годов. С таким стилем они считались что мода – это против правил. Кроме этого, в то же время, были популярны куртки названы «токкофуку», имитации курток, которые носили люди батальона «камикадзе». В отличие от курток «камикадзе», «токкофуку» имеют большую вышивку иероглифики. Их любят люди, которые взяли на мотоциклах и мешающие другим, и назвались «босозоку». Такие куртки стали более популярны благодаря фильму и драмы в связи с «босозоку». Однако в 1990-ых годах, теперь такие моды уничтожились, а американский стиль одежды был популярен, потому что временно популярные актёры носили одежду по-американски. Этот стиль любят группы хулиганов названы «тима», которые гуляли в модных местах. И после двух тысячного года популярен стиль афроамериканских гангстеров, с простой одеждой большого размера и аксессуарами одним цветом в группе. И со сих пор джерси типичны. Так менялись мода.

Как вы думаете к стилю одежды любимы хулиганями? Какой стиль вы любите?

《日本語》

皆さん、こんにちは。今回のディスカッションのテーマはファッションということで、日本とロシアの不良のファッションについて調べてきました。なぜ不良のファッションなのかと言いますと、彼らのファッションは、若者の流行に大きな影響を与えてきたからです。それでは、ロシアの不良ファッションを紹介します。インターネットの情報を参考にしたので、かなりステレオタイプなものになっているかもしれませんが、ご了承ください。1940年代の戦後には、帽子にショートブーツ、金歯というスタイルが不良たちの間で流行しました。もともとは貧しい不良少年のスタイルだったのですが、裕福な家庭の少年の間でも流行りました。そして、1990年代には多数のギャング集団が現れ、新たな不良ファッションが生まれました。位の高いギャングは、赤のスーツに大きなアクセサリという恰好が代表的です。位の低いギャングも、高い服やアクセサリを身に着けることにこだわりました。太いゴールドやシルバーのチェーンがギャングのファッションの大きな特徴です。また、彼らの中には「雄牛」と呼ばれる人たちがいました。彼らは、アメリカの俳優の影響で、体を鍛えたり、格闘技を習ったりしていました。彼らは、シルバーのアクセサリ、ジャージ、革のジャンパーを身に着けており、この「雄牛」の言動や服装を真似た若者が増えて、流行しました。彼らは「ゴブニク」や「ゴボタ」と呼ばれました。ただし、現在の「雄牛」はジャージよりも、革のジャンパーを好んでいるようですが、「ゴブニク」は現在でもジャージに革靴というスタイルが定番らしいです。ジャージはアディダスを着ている人が多いらしいです。

さて、それでは日本の不良ファッションの変遷について説明します。日本の現代的な不良ファッションの起源は、明治時代の「バンカラ」と呼ばれる人々のファッションです。彼らは、あえて着古したボロボロの服と帽子を着用することで、表面的なものではなく、真意を追究するという意思表示をしていました。しかし、戦後に衣料品の質が向上したことに依り、着古しではなくわざと服を傷つけて着る人が増えました。それによって本来バンカラの人が持っていた「真意を追究」という考えよりも、ファッションとしての側面が強くなり、のちに流行する変形学生服へと繋がっていきます。変形学生服は1970年代から流行り出したファッションです。このファッションは、学生服の上着の丈を極端に長くしたり短くしたりすることで校則に従わない反抗心を表していました。さらに、同時期に流行したのが、特攻服という服です。この服は、旧日本軍の特攻隊という部隊の軍服を真似たものですが、軍服との大きな違いは、大きな漢字の刺繍がしてあることです。この服装は、暴走族と呼ばれる、オートバイに乗って迷惑な運転をする不良集団に好まれました。暴走族に関連した映画やドラマが数多く制作されたことで、人気が高まりました。しかし、1990年代に入るとこれらのファッションは衰退して、かわりにアメリカ風のファッションが流行するようになります。その背景には、当時人気のあった俳優達がアメリカ風のファッションをしていた為です。このファッションは、チーマーと呼ばれる繁華街にたむろする不良集団に好まれました。そして2000年代には、アフリカンアメリカンのストリートギャングの服装を真似たファッションが流行しました。彼らの特徴は、サイズの大きいカジュアルな服を着用すること、チームカラーの小物を身に着けることです。また、このころにジャージが不良の代表的なファッションとなり、その傾向は現在でも見受けられます。以上が日本の不良ファッションの変遷となります。

以上が日本とロシアの不良ファッションについてですが、みなさんは不良ファッションについてどう思いますか？皆さんはどのようなファッションを好むでしょうか？

●ディスカッション

- ・ ロシアでは 1930 年代頃から不良がタトゥーを入れるようになった。現在では若者がファッションとして入れている。
- ・ 不良の中でも身分が高い人はしっかりとした服装、低い人はだらしない服装というのは日本とロシアで共通している。
- ・ ソ連崩壊で赤のスーツ、金の指輪・ネックレスが裕福であることを示すようになった。
- ・ 1990 年代のロシアでは普通の人々の間でリーゼントが人気になった。
- ・ どのような社会、共同体でも服装は社会性を反映する。
- ・ 服装はリーダー性を示す。
- ・ ロシアのことわざに「ロシア人は服で会う」というものがある。
- ・ ロシアでは学校にも冬はコートを預ける場所がある。
- ・ ロシアの制服はきちんとした印象なら何でも良く、アクセサリ、メイクも許されている。
例：黒スカートまたはズボン(女子もズボン可。寒い冬などは特に履く人が多い。) 白ブラウス、ジャケット(、私立の学校ではエンブレム)
- ・ ソ連時代は学校に薄着(半袖や短いズボン)で来てはいけないという校則があった。
- ・ プロムのような、ドレスを着た豪華な卒業パーティーがある。
- ・ 日本には制服など 1 つの社会的な特性を表す服があるが、ロシアにはない。
- ・ 日本における七五三の着物と同様、ロシアでも子供が正装をするのは冠婚葬祭くらいである。
- ・ ロシアでは痛みを忘れさせるために小さい頃にピアスをあけさせる。
- ・ ロシアの子どものファッションでは昔のテイストを混ぜたものが人気になっている。
- ・ ロシアでは Aliexpress という Amazon に似た通販サイトでよく服を購入している。
- ・ ロシアでは雑誌よりもお店に行くことでトレンドなどを知る。
- ・ ロシアでは冬の衣服は値段が高い。
- ・ ロシア人女性はヒールを好む人が多い。
- ・ ロシア人男性の服装や髪型が女性ようになってきている。
- ・ ロシアでは 2000～2010 年頃にかけて日本のアニメの影響で厚底の靴が流行した。
- ・ ロシアでは古着に対してあまり良いイメージはない(日本では下北沢など古着で有名な街があり、ユニークな一点ものというイメージ)。
- ・ ロシアにもペアルックはあるが、日本ほど多くはない。

2. 2. 2 理想のリーダー像

●文化紹介

《ロシア語》

Я рассказу о жизни Тито, лидера Югославии.

Иосип Броз родился в Хорватии в 1892 г. Его стали называть партийным псевдонимом Тито когда он вступил в коммунистическую партию. Тито воевал против Германии для второй мировой войны. После войны, Тито строил Социалистическую Федеративную Республику Югославию. Он был президентом в течение двадцати семи лет.

Люди Югославии любили и уважали его. Югославия ставила целью дружбу между народами Югославии. Поэтому, националистические движения подавлялись. Например, в 1971г. В «хорватскую весну» даже выступления студентов были разогнаны. Позже хорватский президент Туджман также был уничтожен. Когда его не стало в 1980 г., все сильно горевали. Но несколько политиков начали критиковать его.

Страна, которую он построил, не сохранилась. Война начиналась в Югославии в 1991 г. много воевавших погибли и много мирных жителей было убито. Югославии уже нет.

Я думаю, что он был хорошим лидером по двум причинам. Он построил дружбу между народами. И люди любили его. Но несколько люди говорят, что он был диктатором потому что он рассеял тех, кто был против Тито. Что вы думаете о нём?

Спасибо за то, что вы слушали.

《日本語》

私はユーゴスラヴィアのリーダーのチトーの人生についてスピーチします。

ヨシップ・ブロズは1892年にクロアチアで生まれました。彼は共産党に入ったときチトーと呼ばれるようになりました。第二次世界大戦のとき、チトーはドイツと戦いました。戦争のあと、彼はユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国を建て、27年間大統領を務めました。

ユーゴスラヴィアは民族の間の友愛を目標に掲げていました。そのため、民族主義者は弾圧されました。たとえば1971年の「クロアチアの春」では、学生さえも逮捕されました。後のクロアチア大統領であるトウジマンも失脚しました。1980年にチトーが亡くなったとき、皆が悲しみました。しかし、一部の政治家は彼を批判し始めました。

彼が建国した国は長くは続きませんでした。ユーゴスラヴィアでは1991年に戦争が始まり、多くの人が犠牲になりました。ユーゴスラヴィアという国はもうありません。

私は、2つの理由から、チトーはいいリーダーだったと思います。彼は一時的とはいえ民族の友愛を打ち立てましたし、人々は彼を愛していたからです。しかし、自分に反対する人を弾圧したことから、チトーを独裁者だと言う人もいます。あなたは彼についてどう思いますか？

●ディスカッション

- ・ チトーのリーダーシップは矛盾しているものであり、死後の崩壊は必然である。
- ・ プーチン大統領は国内問題があるものの、外交では高評価を得ている。
- ・ ロシア国民はプーチン大統領の財力など様々な要因から「プーチンに従わなくてはならない」と考えている。
- ・ 「昔のようにしよう」というリーダーが多い。
- ・ 良いリーダーは人々のために何かをする。
- ・ リーダーは人々に役割を分配できる方が良い。
- ・ リーダーは何かに興味を持っていて熱心である必要がある。
- ・ リーダーは何かに上手である必要はないが、最低限得意な方が良い。
 - ⇔上手いか下手かは別問題？
- ・ 生物学の実験結果では、背が高くがっしりした男性がリーダーに選ばれやすいという結果が出ている。
 - ⇔小柄な女性がクラスをまとめている例などから関係ないのでは？
- ・ リーダーは任意の社会・国家でルールを順守する必要がある。
- ・ リーダーは時にルールを変えることができるが、他の人々の賛同が必要である。
- ・ リーダーは民主主義的に選ばれなくてはならない。
- ・ リーダーは交代しなければならない。
- ・ ロシアでは「リーダー」について心理学で学ぶ。
- ・ 封建時代の考えに「主君に従う」というものがあり、その名残から今でもロシア人は自分で何かを決めようとはしない傾向にある。
- ・ ロシア人は結果に関わらずリーダーという存在を求める傾向があり、リーダーに対する愛が強い。結果に対する意見も批判ではない。
- ・ 日本人はリーダーに対する批判が割と多い。
- ・ ユーゴスラヴィアやロシアのような多民族国家では問題が起こりやすい。このような国におけるリーダーは時に強く、強引である必要がある。
- ・ 日本では民族などの致命的な問題が無い分、ロシアのようにリーダーが強くなる必要はないかもしれない。

2. 2. 3 学生生活

●文化紹介－小堀航己

《ロシア語》

Часто говорят, что в Японии очень трудно поступить в университет. В самом деле, в многих случаях считают, что поступить в лучший университет, колледж и т.д. очень важно. Чтобы поступить такой университет большое число школьников занимаются подготовкой всё свое свободное время.

Однако, в большинстве случаев такие старания для окончания университетов и других учебных заведений не нужны. Большое количество домашнего задания дается только в рамках некоторых учебных предметов. И, вообще, если разобраться, столь сильное старание каждый день не нужно. Конечно, существует несколько исключений, в случае подготовки врачей, адвокатов и т.д., Большой процент студентов оканчивают жизни суицидом, из-за того, что они ежедневно целый день очень много занимаются.

В Японии студенты в свободное время имеют возможность находить развлечения (кружками по интересам, подработками и т.д.) Конечно, между жизнями разных студентов есть большая разница в жизнях. Однако, не смотря на это стоит учитывать, что, студенты также живут в условиях капитализма и в большой части обстоятельства их жизни связаны с деньгами. Самый важный фактор это оплата за обучение в Японии. Так, для студента, который учится в государственном университете оплата за обучение составляет 535.800 иен, для студентов частных университетов, особенно факультета естественного науки, 1,080.000 иен. В среднем, студент медицинского и стоматологического факультета платит за обучение 2.740.000 иен. Для других факультетов средняя плата составляет 750.000 иен. В Японии средняя сумма годового дохода 4.400.000 иен, и далеко не все семейства имеют возможность оплачивать обучения. Со временем сумма оплат только увеличивается, попутно с этим увеличением также увеличивается число студентов, которые подрабатывают, чтобы покрывать расходы на обучение и жизнь. Из-за этого явления, многим студентам трудно позитивно принимать участие в образовательном процессе и выполнять учебные задания должным образом. Существуют фонды, одаживающие бедным студентам деньги, но после окончаний ВУЗов мало студентов могут в полной мере рассчитаться с фондами. Таким образом, в Японии во многих случаях бедность семей является помехой, но средство для уменьшения этой разницы точно есть.

Показательное средство - получение стипендии, освобождение оплат за обучение или ее возвращение. Однако, для введения таких мер, необходимо доказательство Вашей исключительности. Многие бедные семьи не соответствуют норм исключительности для получение таких льгот. Сейчас данную проблему учении указывают студенты и их семьи. Мы можем наблюдать то, что большое число студентов находятся в бедственном положении судя по их внешнему виду(ветхой одежде), обшарпанными стенами в жилище, и дешевой еде, которой они питаются. И так, я рассказал о жизни студентов в Японии, но это ещё не всё. Есть еще много интересных тем для обсуждения. Так, например, в нашей стране есть много видов подработки и кружков досуга. Кроме этого, мы, студенты в Японии очень интересуемся студенческими жизнью студентов в России. Используя этот шанс, давайте обмениваться опытом со студентами из другой страны.

《日本語》

よく言われることの中に、日本の大学は入りにくいというものがあります。実際に日本では多くの場合、有力な大学に入学することが非常に重要視されており、希望する大学に入学するために余暇活動のほとんどまたはすべてを我慢して勉学にいそしむ場合も珍しくありません。

しかし、大学の課程を全うするためにこれと同等以上の苦勞を強いられるという場合は多くないようです。多くの課題を課する授業も多くはなく、日頃の努力が必要なほど要求水準が高い場合はあまり多くありません。そのため、弁護士や医者などを目指すなどといった少数の場合を除き、大学に入学すると勉強漬けの日々から離れる学生が多いのが現状です。こうして余裕を得た日本の大学生は娯樂のほか、サークル活動、アルバイト、企業研修などに勤めます。さらにこのような活動にもいろいろな種類のものであるので、大学生たちの間では、その生活が大きく異なります。しかし、個々人の間にあらゆる事情の違いがあるとはいえ、学生も資本主義社会に生きているため、お金にまつわる事情が学生生活を支配している部分が大きいといってよいでしょう。そこで今回は日本の学生を取り巻くお金の事情に触れていきたいと思います。

日本の大学の授業料は、国立大学で一律年間 535,800 円、私立大学では 2015 年現在平均して、文系で 75 万円、理系で 105 万円、医科・歯科系で 274 万円となっています。日本の社会人の平均年収は 2015 年現在一人当たり 440 万円程度ですから、この授業料がどの家庭でも簡単にまかなわれているというわけではありません。日本の大学の授業料は長らく増加の一途をたどっており、それに伴って自身の学費や生活費をまかなうためのアルバイトをする学生が増えています。これによって授業への積極的な参加や課題に取り組むことに困難が生じるケースが後を絶ちません。各財団や公的機関から貸与型の奨学金による援助を受けた学生が大学卒業後、首が回らなくなってしまうという社会問題も生じています。このように日本では多くの場合生まれた家庭が裕福でなければ大学に通い続ける上でハンディキャップを背負ってしまう場合が多くありますが、この格差を狭める手段がないわけではありません。

その手段の中で代表的なものとして、給付型の奨学金や授業料免除、授業料還付といった措置を受けるというものがあります。しかし給付型の奨学金を受給したり授業料還付を受けたりするにはある程度優秀な成績を収める必要があり、授業料免除を受けるにもたいていは前提として入学の比較的難しい国公立大学に入学する必要があるなど、自らが優秀であることを示す根拠が要求されます。また、これらの措置を受けるための基準に達してはいるが貧しいという家庭が割を食うケースも珍しくありません。こういった意味での学びにくさが学生本人やその家庭で叫ばれているというのが現状です。衣食住を犠牲にするのが当たり前になっている学生も私たちの身の回りに多くいます。

以上日本の大学生についてお話ししましたが、もちろんほかの側面を覗けばアルバイトやサークルが多様性に富んでいるなど、興味深い話題がたくさんあります。また、私たち日本人学生はロシア人学生がどのような学生生活を送っているのかに深い興味を持っています。せつかくのこの機会ですから、お互いの国の学生に気になることを遠慮せずにぶつけてみましょう。

●ディスカッション

- ・ ロシアの大学は宿題が多く、1日6時間程度かかることがある。
- ・ ロシア人学生はお金が無い人が多く、1日12時間働くこともある。
- ・ ロシアでも友人のノート等をコピーして勉強することがある。
- ・ ロシアの大学では生徒を集める為に厳しく指導しない場合がある。
- ・ ロシア人学生は散歩が多い(1日3時間程度)。

2. 2. 4 理想的な異性の口説き方

●文化紹介—南谷成貴

《ロシア語》

Вы смотрели, «Шёпот сердца»? Это полнометражный мультфильм, опубликован фирмой «Стадио дзибури», в 1995 году. Его героиня Цукисима Сидзуку в девятом классе школы, которая любит читать, по сюжету фильма: Однажды она замечает то, что на библиотечных карточках между страницами книг написаны фамилия и имя «Сэдзи Амасавы».

Сидзуку незнакома с Сэдзи, который уже брал все книги, которые она хочет взять почитать. Посмотрев его имя и фамилия, она начинает воображать его. И в один прекрасный день она случайно знакомится с ним, затем им постепенно влюбляется в него. «Шёпот сердца» - очень приятный и сентиментальный роман. Можно подумать, что человек таким образом объясняется в любви. Однако по сюжету этого романа есть очень тонкий план действий. На самом деле, роман Сэдзи можно рассматривать с двух точек зрения: Во-первых, в начале романа, на всех карточках от книг, которые Сидзуку возьмёт, был написаны имя и фамилия Сэдзи – это случайность? Нет, это не случайность.

В действительности, раньше этой сцены Сэдзи узнал то, что Сидзуку очень часто ходит в библиотеку, хотя он никогда не встречался с Сидзуку. Узнав то, он взял все книги, которые Сидзуку ещё не брала, и на карточках, от которых он написал свой имя и фамилия. Схватывая каждую книгу, он смотрит карточку от книги, и возвращает её. Кроме этого, в фильме он говорит, «Я прочитал очень много книг, чтобы написать свои имя и фамилию на карточке, раньше, чем ты.»

Чтобы сохранить себя в ее памяти, он вечно повторяет это «безумное» действие. Во-вторых, при первой встрече с Сидзуку, Сэдзи говорит: - Эй, лучше не выбирать «Бетонную дорогу».

Прежде этого, Сэдзи нашёл книгу, которую Сидзуку оставила, и он почитал «Бетонную дорогу», пародию «Дороги в деревне», которые были написаны в той книге. Как я уже отметила, Сэдзи так обожает Сидзуку за то, что он повторяет безумное дело. Почему так, делает Сэдзи? На самом деле у любви и ненависти есть одинаковые предпосылки. В любви, к себе кто-нибудь питает ненависть – это не худшее, а самое худшее – это безразличие. Важно, как изменить безразличие на интерес. Более того, изменить безразличие к любви – это трудно, а к ненависти – это просто. Сэдзи выбрал более простое средство, и у него получилось.

В-третьих, после первой встречи, Сэдзи ещё встречается с Сидзуку. При каждой встрече он дурачит её. И во второй половине он ведёт себя совсем как друг: он показывает свою расположенность. Например, он говорит ей, что его неприятные слова были с нарочным расчетом, и что на самом деле ему нравится её поэзия. Эти методы показывают практику любви и нелюби в любовной психологической сфере. Преобразование «из нелюби в любовь» - более неожиданное, чем преобразование «из любви в нелюбовь», и сильнее укрепляет любовь. Когда человек, который сначала не любил вас, вдруг даёт высокую оценку, вы вдруг начинаете любить этого человека. Вы больше любите человека, оценка к которому меняется с худшей на лучшую, чем человека, который от начала

до конца любил вас. Вы можете смириться с нелюбовью вашего любимого человека, хотя бы для того, что вы сделать его/её вашим парнем или вашей девушкой?

В конце фильма, я чувствую судьбу из следующие слова: «Я почти умер для любви и много раз призывал тебя, в сердце как «Сидзуку!» Тогда ты в самом деле подвинулась вперёд из окна. Это разве не прекрасно?» Эти слова он говорит сутра, когда Сидзуку случайно встала и смотрела на окно, Сэдзи появился, и Сидзуку подошла к Сэдзи. Сидзуку смотрела на окно в самом деле по случайности, а Сэдзи который ждёт прежде рассвета, необычен...

Как вы думаете? Много других сцен остались, но число сцен слишком много, поэтому не ещё говорю. Если вам интересно, посмотрите фильм обязательно. Спасибо за внимание.

《日本語》

皆さんは「耳をすませば」を知っていますか？1995年に公開されたスタジオジブリによる長編アニメ映画です。この映画のあらすじは、主人公は中学三年生で読書好きの月島雫。あるときに自分が読む本をすべて先に借りて読んでいる「天沢聖司」という名前が図書カードにあるのに気が付き、その人物に想いをめぐらせていく。そしてある日偶然彼に出会い、しだいに彼に惹かれていくという非常に甘酸っぱい物語。これのどこが異性の口説き方と関連があるのか、不思議に思いますよね。ところがこの物語、異性の落とし方の模範解答とでもいいますか、非常に緻密な策が張り巡らされております。

どうということかという、この物語を先ほど申し上げた天沢聖司君からの視点で見ると、かなり違った様子を呈してきます。第一に、話の冒頭部分で雫が自分の借りた本すべての図書カードに天沢聖司の名があるということ。これは偶然でしょうか。いいえ、違います。これは天沢聖司君が、まだ会ったこともないのに、雫が図書館に通い詰めているということを知ります。それを知った彼がとった行動というのは「読書好きな雫がまだ読んでいない本を片っ端から借りて図書カードに名前を書き込む」です。聖司の狙い通りに雫は彼に興味をいだき始めます。雫が読んだ本は借りないように、図書館にある本を一冊一冊手にとってカードをチェックし、戻す。しかも劇中で彼は「俺お前より先に図書カードに名前を書くためにずいぶん本を読んだんだからな」と言っています。雫に印象を持たせるためにかなり狂気じみた行為を永遠と繰り返していたことが分かります。

第二に、初対面で聖司はこういったセリフをはきます、「おまえさあ、コンクリートロードはやめた方がいいと思うぜ」と。これはたまたま雫が忘れていった本を聖司が拾い、そのなかにあった雫が作詞したカンントリーロードの替え歌コンクリートロードを聖司が読むという前後関係なのですが、先に言ったとおりに聖司は狂気じみた行為を行うほど雫に惚れています。それにも関わらず、このセリフ。しかも嫌味ったらしい顔で言います。どうして聖司は雫に対してこのようなアクションを取ったのでしょうか。実は好悪の感情は同じ線上にあります。嫌われているということは恋愛においては最悪ではありません。最悪なのは無関心であること。どうやって無関心から好き嫌いという関心の状態に入るかが重要。しかし、無関心からいきなり好きになるというのは難しい。だが嫌われることは容易い。故に聖司君は初対面で雫にああいったのです。そしてそれは見事に功を奏し、雫に嫌な奴という思いを強く抱かせます。

第三に、初対面以降聖司は何度か雫と会うのですが、そのいずれにおいても雫を馬鹿にしたりします。そして物語後半で、自らの発言が意図した揶揄であることや雫作詞の詩を実は好きであると言ったり、一気に雫に

「いいところ」を見せたりしています。これは恋愛心理学上で言う好きと嫌いの実践です。肯定から否定より否定から肯定の方が意外性が増し、好意を持たれやすくなるのです。自分のことを嫌っていた人から、急に評価されるとその相手への行為は急激にアップしてしまうのです。一貫して好意を持っているよりも、評価が悪いからいいに変わった場合が、最も相手に好意をもつのです。皆さんには相手を落とすためとはいえ、好いている相手に嫌われる覚悟はあるでしょうか？

そして最後に運命を感じさせる言葉。雫が夜明け前に偶然目を覚まし、窓から外を見ていると、聖司が現れます。そして雫が慌てて会いに行くと、このセリフ。「雫に早く会いたくてさ、何度も心の中で呼んだんだ。雫ー！って。そしたら本当に雫が顔を出すんだもん。すごいよ、俺たち。」雫が顔を出したのは本当に偶然なのですが、夜明け前から張っている聖司もなかなか…。

どうでしょうか。本当はもっとたくさんあるのですが、キリがないので割愛いたします。気になる人は映画を見て探してみてください。ご清聴ありがとうございました。

●ディスカッション

- ・ ロシアではVKontakte (SNS)が出会い系サイト化している。その他にも出会いの為のサイトがある。
- ・ リヤザン国立大学の外国語学部には男性が少なく(6人/50人)、女性はインターネット上で出会いを求めることがある。
- ・ 日本では学校・職場等の自らが所属する共同体での出会いが多い。
- ・ ロシアではカフェや通りで女性に話しかける男性もいるが、無視する女性が多い。その一方、ナイトクラブ等での出会いを許容する人が増えつつある。
- ・ 学生結婚の多いロシアでは結婚年齢の平均が23歳と若いですが、離婚率も80%と高くなっている。
- ・ ロシアでは結婚・出産後も労働時間の短縮や子供を祖母に預けるなどの方法で働き続けることが可能である。
- ・ ロシアでは母親や祖母が孫を早く欲しがらる。
- ・ ロシアでも男性が消極的、女性が積極的になっている。
- ・ ロシアでもかわいい男性が人気になりつつあり、日本人男性も人気になっている。
- ・ ロシア人女性の中には外国人と付き合っ結婚し、海外に行きたいと思っている人がいる。

2. 3 滞在記録

8月3日

8月3日の夕方、自分の部屋を綺麗にし、家族にロシア語の簡単な挨拶も教えて家を出た。22:30に羽田空港到着のはずだったが、飛行機の遅延の影響で実際にロマンさんと対面するのは1時間半ほど遅れた0:00になった。会う前からメールでのやり取りをしていて顔写真などを見ていたが、これから10日間ほど行動を共にする上、ロシアという異文化に生きる人物(しかも年齢的には父親に近い39歳)に初めて対面した時は、高揚感と共に一種の緊張感も感じた。言語・文化が違うため、お互いの気持ちのすれ違いからトラブルが生じることも異文化交流では無いとは言い切れないが、ロマンさんは日本人である自分よりも日本人の文化・しきたりに精通していてその点ではとても助けられた。羽田空港から家まで父親が車で迎えに来てくれたが、車のトランクに荷物を入れる際に「これから10日間よろしくお願いします」と言ったことや、納豆・生卵を初めとする日本人特有の食べ物も全て食べる事ができたこと、墨絵や書道、合気道に精通していた点など、ロマンさんとの10日間は日本人と接している感覚を覚えるほどであった。以上のことから、私は異文化交流で得られる経験の他にも、日本の文化・伝統がどのようなものかを再認識する貴重な時間を過ごす事ができた。(文責：諏訪一功)

8月4日

1日目はウェルカムパーティーを行った。昨年の訪日企画では居酒屋でウェルカムパーティーを行ったが、今年は葛西臨海公園でバーベキューをした。長距離移動をしてきたロシア人メンバーたちの疲労を考慮し、朝昼はステイ先でゆっくり過ごしてもらい、夕方に集合した。日本人メンバーは20人弱が参加した。去年の訪口企画でリヤザンを訪れたメンバーにとって今回来てくれたロシア人メンバーたちは皆知り合いだったので、会ってすぐに「久しぶり！」などと声をかけあった。去年の訪口企画に参加しなかったメンバーもバーベキューをしているうちに仲良くなる事ができたかと思う。バーベキューが始まった頃はまだ辺りが明るかったので、皆で海の方へ歩いて行って夕焼けを見た。印象的だったのはセミに対する反応だった。ロシア人メンバーたちにとってセミは見慣れない生き物だったようで「かわいい」と言っている人もいれば「気持ち悪い」と言っている人もいた。地面に落ちているセミの抜け殻を見せたところ、「これがあの羽の生えたセミになるのか」と驚いた様子だった。(文責：楠秀大)

8月5日

ファミリーデーの8月5日、アレクセイさんと僕は都内観光で彼が訪れることを希望していた迎賓館、靖国神社、ニコライ堂に行った。私自身も訪れることが初めてだった迎賓館はとても美しく、凝った内装に圧巻された。アレクセイさん曰く、迎賓館はサンクトペテルブルクにあるペテルゴフと似ているようだ。よく晴れていたこともあり多くの写真を撮っていた。その後、我々は靖国神社の遊就館に向かった。日本の歴史と軍事に興味があるアレクセイさんは1つ1つの展示を丁寧に見て回り、様々な質問を私にしてきた。零戦や特攻兵器である回天、桜花を見て驚嘆していた。日本海軍が気に入ったらしく海上自衛隊の帽子を買っていた。そして最後にはニコライ堂を訪れた。アレクセイさん自身が信心深いこともあり、観光というよりかはお参りに来たという不思議な感覚になった。

猛暑の中、1日中歩き回ったこともあり、夕食はお寿司を食べに行った。

1日中、様々なところを周ったおかげで訪日2日目にしすぐアレクセイさんと打ち解けることができた。

(文責：立古譲治)

8月6日

ファミリーデー2日目、初めて日本を訪れたターニャさんを連れ、お台場の大江戸温泉物語という温泉施設に出かけることにした。10時頃出発し車でお台場に向かう。彼女も私も姉もK-pop好きということで、歌いながらのドライブとなった。

昼前に到着し、まずは浴衣選び。自分で好きな浴衣を選べることにわくわくしていたようだ。また彼女お気に入りのアニメキャラクターの特集もあり、興奮気味で入館。館内は日本の夏祭りの夜をイメージした内装で、提灯の明かりに照らされる室内に様々な屋台が並んでいる。先に屋外にある足湯コーナーへ。びっしりと敷き詰められている足つぼには参ってしまったが、ドクターフィッシュに足をつつかれるのは平気なようで、不思議そうに魚達を見つめていた。お座敷の大食堂で昼食と甘味を頂いた後はいよいよ温泉！日本人とは違い人前で裸体になることに抵抗があるのでは、と心配していたが、意外にも気にしていないようだった。確認すると、ロシアにもサウナ文化はあるし平気、とのこと。中では、温泉の種類の高さに驚き、広い空の下で湯につかる露天風呂には感動していた。しかし、最後の水風呂で、「私、ここ余裕。一番気持ちいいかも。」との感想をもらった時には、さすがロシア人！と思わずにはいられなかった。

地元に戻ると、運のいいことにその日丁度開催していた花火大会に出かけた。屋台で焼きそばや焼き鳥などいわゆる屋台飯を購入し、花火を待つ。その間しりとりをしていたが、彼女は本当にたくさんの日本語の単語を知っていた。花火が始まると、綺麗な写真を撮ろうと、奮闘していた。帰り道に彼女に、今のところ日本で一番楽しかったのは何かを聞いたところ、温泉！と言ってくれたので、連れて行って本当に良かったと思った。(ちなみに1位温泉というのは、最終日まで変わることがなかった！) 温泉にお祭り、花火に屋台、と日本の夏の文化を盛りだくさんに体験してもらったことのできた1日であったと思う。

(文責：稲永真守梨)

8月7日

訪日企画4日目では、上智大学でのディスカッションと浅草散策を行った。ディスカッションは、日本人が問題提起スピーチを行い、それを基に話し合う、というように進行していった。最初のテーマは「ファッション」で、問題提起スピーチでは「ロシアと日本の不良ファッション」が挙げられた。二つ目のテーマは「理想のリーダー像」で、ユーゴスラヴィア大統領であったチトーがスピーチで取り上げられた。いくつかのグループに分かれてディスカッションを行ったが、各グループ、日本語やロシア語、英語を使いながら積極的に話し合いを進めることが出来たと思う。ディスカッションの後は電車で浅草へと向かった。浅草に到着後、まず仲見世通りを散策した。猛暑日であったが、ロシア人は食べ歩きやお土産を買うことを楽しんでいて、疲れは全く見えなかった。食べ歩きでは揚げまんじゅうやかき氷を美味しそうに食べていたり、お土産として着物を買ったりするなど、日本の文化を存分に体験してくれたようで、見ていてこちらも楽しかった。仲見世通りの散策の後は、東京ソラマチへ行った。ロシア人からは東京スカイツリーに登りたいという意見も出たが、チケット代が高かったため、断念することになった。そこで、ソラマチでは集合時間を決めて自由行動をとることにした。自由行動では、さらにお土産を買ったり食事をしたりと、有意義な時間を過ごすことが出来たと思う。

(文責：須藤瞳)

8月8日

訪日企画5日目は2度目のディスカッションから始まった。場所は東京大学駒場キャンパスの和館で、ロシア人たちは畳敷きの部屋に興奮している様子であった。加えて外には緑が広がりセミの鳴き声も聞こえるなど、東京にしながら日本の夏を感じることができたように思う。そのような中で行われたディスカッションのテーマは「日本とロシアの学生生活について」と「理想的な異性の口説き方」であった。「日本とロシアの学生生活について」では紙に1日の過ごし方を書き出して各自の過ごし方を比較したが、2国の学生生活の差異に驚かされた。「理想的な異性の口説き方」ではロシアの恋愛事情を知ることができ、大変に興味深かった。

ディスカッション後は東京大学の学食で昼食をとった。ロシア人たちは日本人の学生も普段食べている定食やうどんなど選んでいて、日本の学生生活を感じることができたのではないだろうか。

昼食を取った後は徒歩で渋谷に移動した。移動途中もロシア人たちは大学キャンパス内の自然や道中の景色を写真に収めるなど日本の景色を楽しんでいた。ロシア人との会話も弾み、暑い中ではあったが楽しい移動となった。

渋谷ではボウリングを行った。ロシアにもボウリングはあるようだが、頻繁に行くものではないようだ。日本人とロシア人双方が楽しむことができ、非常に良かったように思う。

ボウリング終了後は一度解散したが、一部のロシア人は原宿へ向かった。竹下通りを抜けてクレープ等を楽しんだ後はキデイランドへ行き買い物をした。キデイランドには日本のキャラクターグッズが多く売られており、ぬいぐるみを買ったりグッズを見たりして長い時間楽しんでいる様子が印象的であった。

1日で日本の多くの要素を感じることができ、充実した1日となった。

(文責：緒方美友)

8月9日

訪日企画後半戦の初日となった6日目。この日はまず朝の10時ごろに秋葉原に集合した。そして午前中は秋葉原の街を散策して過ごした。電気街の街並みはロシア人メンバーたちにとって珍しく新鮮なものであったと思う。途中で家電量販店に立ち寄って、各自で興味のあるものを見て回っていた。

昼食後は予定では下北沢に移動して時間を過ごすことになっていたが、ロシア人メンバーたちの希望により、秋葉原に残って散策を続けることにした。アニメのグッズなどが置いてある店に立ち寄った。メンバーによって差はあるものの、皆何らかの日本のアニメを知っているようだった。漫画を買っているメンバーもいた。見てみると英語などに訳されたものではなく普通に日本語で書かれたものであったが、「絵を見れば大体はわかる」とのことだった。

3時くらいまで散策を続けた後は皆でカラオケに行った。ロシア人メンバーの中には、我々日本人でも知らないような古い軍歌や演歌を歌っていた方もいれば、字幕を無視してロシア語で歌っている方もいた。有名な日本のアニメの映像が流れた時は「おーっ」と歓声が上がったりしていて、終始盛り上がっていたように思う。終盤には日本のカラオケ機に入っている数少ないロシアの曲「**капюша**」をみんなで歌った。

(文責：楠秀大)

8月10日

日差しの強い中、埼玉県川越にある小江戸の散策を行った。まず、初めに小江戸の近くにある神社に行った。みんなでおみくじを引き、ロシア人でもわかるような英語のおみくじもあったため、とても盛り上がった。また、この神社には風鈴がたくさんあり、とても風情があり、ロシア人にとっても日本を感じることができたはずだ。次に昼食を食べに行った。当初予定したお店は混んでいて入れなかったが、急遽入ったお店で飲み物のサービスもいただき、また、お寿司やうどんといった日本食を食べたため良き思い出になったはずだ。昼食後、小江戸散策を始め、着物を買ったりコマやけん玉などを楽しんだりした。浅草散策とはまた違った思い出ができた一日だった。

(文責：弓取奨平)



8月11日

訪日企画8日目は鎌倉をまわった。始めに高德院へ行き鎌倉大仏を見た。大仏の内側へも入り、日本の寺院を隅々まで見学してもらえたようだ。また寺の売店で売っているお守りも購入、ロシア人にしてみれば漢字が連なった願掛け袋は興味深かったのではないだろうか。

鎌倉といえば数々の古風な店が立ち並んでおり、それらはロシア人にとっても魅力的だったように思える。日本伝統のおもちゃ「けん玉」を買ったり、手裏剣や苦無を売っている店の前で立ち止まったりと、かなりマニアックなものまで知っていた。日本らしいものが多い鎌倉だが、惜しくも時間が足りずロシア人はもう少し店を見て回りたい様子だった。

8日目の最後は海へ向かった。連日の日本観光にもかかわらず、ビーチにつくとすぐ海に入って行った。内陸部が多く遊泳できる海も少ないロシア人には大好評だった。

鎌倉は店や町並みはもちろんだが、歴史的に見てもとても面白い場所だ。是非また日本にきて、新しい角度からも見てもらえたらと思う。今回の企画を通し日本の貴重な部分を再発見できたことを含め、訪日は両者にとって有意義なものだったと感じる。
(文責：高柳りさ)

8月12日

12日はフェアウェルパーティーだった。企画続きの日々はこの日で終わりとなった。企画では都心から郊外まで、広範囲に出かけることができた。小江戸、鎌倉から秋葉原、渋谷・原宿といった日本のあらゆる文化を紹介することもできた。毎日様々なところへ出かけ、くたくたになっているはずなのに全く疲れを見せないロシア人たちに驚いた。一緒の時間を共有したことによって言語の壁を越えた交流ができ、親しくなれたことによって、フェアウェルパーティーでは笑い声の飛び交う楽しい時間を過ごすことができた。

(文責：田原歩実)



8月13日

訪日企画最終日となった13日は、全体でのプログラムは羽田空港に集合するのみであった。

各ロシア人と受け入れ家庭は集合時間まで買い物に行ったり、家で映画を鑑賞したりして過ごすなど最後の時間を楽しんだようであった。

羽田空港に集合して荷物を整理した後は、ロシア人にとって日本で最後の食事を一緒にとった。箸を上手に使って、海が遠いリヤザンではなかなか食べることのできない刺身や丼など和食を味わっていた。「どの日本食がすき？」と聞くと「日本食は全部おいしい」と返してくれるロシア人の話に、日本人として非常に誇らしく思った。

夕食を終えるとすでにチェックイン開始の時間であった。チェックイン待ちの間にも最後の会話を楽しむ日本人とロシア人の姿が印象的であった。

チェックイン後は日本人の終電の関係ですぐに別れの時がやってきた。何故か円陣を組んだのち、集合写真を撮影した。その後、日本人からメッセージを添えた色紙をプレゼントした。ロシア人たちは受け入れの人、親しくなった人と最後の別れをした。涙を浮かべる人もおり、この10日間が非常に充実したものであったことを感じさせた。別れを惜しみつつ、ロシア人たちは帰国の途についた。

日本やロシアで私たちが再会できる日が来ることを祈っている。

(文責：緒方美友)



2. 4 全体感想

諏訪一功

日ロ学生交流会の一大イベントである訪日企画が終わり、無事に終わった安心感と充実感で溢れている。僕はホームステイの受け入れ、さらに訪日企画の企画幹事長であったため、全日参加をした。訪日企画全体を通して感じたことは、今回来てくれたリャザンのメンバーはとにかく歩くのが好きなことである。日本の夏はロシアと比べて暑い上に湿気が多いので、ばててしまう人が出てくるのかと心配していた。しかし、ロシア人は「全然大丈夫です。もう慣れました。」と言い、電車で行くか歩いて行くか選択を迫られた時は必ず「歩きで行く。」と答えていた。これには日本人メンバーたちは驚いていた。日本のじめじめした暑さに弱いのは、ロシア人ではなくむしろ日本人だったと感じた。また、今回の訪日の中で一番ロシア人たちが喜んでいて僕が思ったのが、由比ヶ浜の海に行ったことである。あらかじめ水着を持ってくるように伝えていたので、ロシア人たちは泳いで非常に楽しんでいて。ロシアは国土面積が広く、海が近くにあることが少ないので海を見ることができてよかったと思った。今回の訪日でロシア人と共に行動したことで、お互いの文化の違いを感じ、話し、また、日本の素晴らしい環境や文化を紹介したことで改めて日本の良さに気づくこともできた。リャザンメンバーにはまたぜひ日本に来て欲しいと思う。

塩田 皐月

リーナは日本に興味を持っていて、日本の童話の「カチカチ山」について、なんて恐ろしい話なのと笑いながら話してくれた。この話を日本では子供たちにするのかと聞かれて、これまで何の疑問も持たずに聞いてきた日本昔話を改めて違った目線で見ることができ、暮らしている国の環境が違っていると、同じものを見ても同じようには見えないのだということに気づくことができた。また、ロシア人たちは非常によく歩く。なぜそんなにたくさん歩けるのかと聞くと、ロシアでも普段から散歩はよくするし、外国に来たのだから、できる限り全てを見たいのだと答えてくれた。日本人が海外に行ったとしても観光地を巡れば満足する人が多いのに対し、ロシア人たちは探究心、好奇心が強いと感じた。

これまで外国の方と接する機会がほとんどなかった私は、ホームステイを受け入れたことでコミュニケーションをとることがいかに大切かということを学んだ。日本人同士でも同じことなのだが、言葉がうまく伝えられないとき、笑顔でいることや、何とか伝えようと手や物を使ってみることはその場の雰囲気や軽くなることに役立つこと、そうしなければなんとなくでも気持ちは伝わりやすくなることを知り、何かを伝えるために必要なのは言葉だけではないのだということを感じることができた。

柳沢 桃子

今回の日ロ学生交流会の訪日企画には、私はホームステイ受け入れ側として参加した。

ホームステイの受け入れを、始めは、「異文化交流」と称して軽い気持ちで名乗り出、漠然と楽しいのだろうと思っていたが、実際の訪日企画は想像以上のものだった。

第一に、意思疎通が困難であったということだ。相手が何を考えているのか。一応、英語や日本語(ロシア語はまだ日常会話ができるレベルにも至っていないため)で話すものの、相手がほんとうは何を求めているのか、何をしたいのか、それを汲み取る以前に、言葉の表面上での疎通までしかいくことができなかつたため、お互いのすれ違いが多々起こってしまった。ロシア人が抱く私への不満や苛立ちが起こったのも当然、逆に私もどうしてそれならばっきりと口で言わないのかと思ったり、何をしてあげればいいのかと途方にくれてしまったりした。

実際に過ごしたこの約10日間は、私にとって負担と不安と疲労でいっぱいだったが、最後に10日間過ごした彼女とハグをしたことで、それまでの日々が懐かしく感じられ、想像していた漠然とした「たのしい日々」という括りを超え、かなり貴重な経験が出来たと思う。異文化交流と称して、大したことがないイベントは多いが、異文化交流がある際に起こる大変さや難しさに逃げ腰にならず、ぶつかることによってその出来事が、自分自身に糧になるのではないかと思う。

今回私がロシア人受け入れホストファミリーに立候補したのは、いくつか理由があった。ここでは1つ挙げたいと思う。

米国などと比べて「近くて遠い」と言われるロシア、ここで暮らす人々と寝食を含め10日間過ごすことで、ロシア人はどんな考えをして行動するのか自ら経験したかったというものである。

プログラム期間、業務連絡あるいは学校のことなど情報ベースの会話になってしまわないよう、東京の街、人、文化を見た感想を聞くようにした。始めは戸惑いもあったようだが、慣れるにつれて、ヴィーカさんは「日本とロシアは似ている」と言うようになった。私はまだロシアを訪れたことはないが、ロシア人たちの言動からは日本人と共通したところが多くあった。その一方で違いもあるように感じた。ロシア人は仲良くなるととてもフレンドリーであるが、自分の世界をある意味重要視するために、一般的な日本人と比較すると団体行動を外れているように感じられる場面がある。しかし、そのように自らの内側に考えを巡らせることを、他人のことを考える際にも応用する、そこから現れる言動は、他人を本当に考えたものであって、プログラム期間中、私はそれを何度もありがたいと思った。

日露両国関係には様々な懸案がある。しかし経済協力や両国民の交流を通じて、その関係性がより良いものになる可能性は少なからずあると考える。今回のプログラムで私は日本の良い部分を少しでもロシア人に知ってもらえるよう行動したつもりである。しかしまだ改善可能とも思う。今後の日露学生交流会またそれ以外での活動でそれを実行したい、ロシアとの関係が良くなるよう、少しでも活動に取り組めたらと思う10日間であった。プログラムに携わった全ての人に感謝する。

李優大

私は日ロ学生交流会のOBとして、通訳補助を頼まれ、参加した。ロシア側の参加者の中には大学の教員が2人いらっしゃり、日ロにおけるリーダーシップとは何かに関するディスカッションの際、その一人の法学部の教員が、社会契約論と自身のソビエト時代の経験を基に、議会においても会社においてもリーダーたるものは自身が中心となった規則それ自体に従わなければならない、それができるものが人びとにリーダーとして承認される存在であると述べていたのが印象的であった。それを通訳できたのは通訳真利に尽きるとも言えることであった。

清水真伍

私が日ロ学生交流会の訪日企画に参加するのは今年で三度目になる。三年間ロシア語を学んでいるのだが、日本ではロシア人と交流する機会が少ない。そこで少しでもロシア人と交流出来れば、と思い今年OBとして参加した。しかし元々下手な私は外国語では一層内気になり教科書にあるような質問を繰り返すばかりだった。一方まだロシア語を学び始めて半年の一年生等の後輩がロシア人達と日本語、ロシア語、英語を交えつつ大変盛り上がっているのを見て驚かされた。三年生として恥ずかしいばかりである。外国人との交流は語学力だけでは不十分であるとはよく言われる事だが、今年の訪日企画でそれを目の当たりにし、後輩、ロシア人から多くを学ぶ事になった。

緒方美友

昨年度の訪日企画ではロシア人と殆ど話せず多くの後悔が残った。そのような中迎えた今年度の訪日企画は、昨年度に比較して多くのロシア人と会話をする事ができたという点で個人的に充実したものとなった。ロシア語で話すことはできなかったが、英語や日本語を交えて日本とロシアについて紹介しあったり、他愛のないことを話したりしたのは非常に楽しい時間であった。訪日期間中を通じてロシアへの関心がより深まったように思う。日ロ間の情勢が動きつつある今、二国間の交流がより盛んになるよう、今後も日ロ学生交流会の活動を通じて少しでも貢献できたらと思う。

私は訪日企画の中で、ディスカッション1日目に参加し、テーマの一つである「理想のリーダー像」に関連して短いスピーチをした。20人近くの人の中でロシア語でスピーチをするのは初めてで緊張したが、なんとか通じたようで安堵した。

ディスカッションでは主に英語を使いつつ、日本語・ロシア語を織り交ぜながら会話した。特にファッションの話題は盛り上がり、日本とロシアの学校の制服について話し合った。大学で1年ロシア語を学んではいたものの、実際に会話で使えるレベルには遥かに及ばないということを改めて痛感し、さらに勉強に励んでいきたいと感じた。

楠 秀大

私は今回の訪日企画を特別楽しみにしていた。というのも、今回リヤザンからやってきた6人のロシア人メンバーは皆、去年の訪日企画で知り合った人たちだったからだ。初日のウェルカムパーティーは彼らとの約1年ぶりの再会の機会となった。会う前は少し不安な気持ちもあったが、彼らは私のことをちゃんと覚えていてくれて、すぐにまた仲良く話すことができた。私のロシア語は1年前より多少成長したとはいえ、まだまだともに会話をできるようなレベルではなく、やはり日本語や英語で会話することが多かった。それでも、セミや寿司のネタなど彼らにとって見慣れないものたちについて説明し、わかってもらえた時は嬉しかった。全日程に参加することはできなかったが、1年ぶりに再会したロシア人メンバーたちと共に東京観光を楽しむことができて良かったと思う。

中山 義裕

去年に引き続き、今年も訪日企画に参加した。1日しか参加できなかった昨年と異なり今年は全日程参加したが、そうしたことで実感、発見したことが多くあった。

中でも、彼らの体力に改めて驚かされた。毎日朝から夜まで歩き続け、時には夏バテでご飯が食べられないことがあっても、ロシア人たちは日程を全てこなし、しばしば「もう一箇所回ろう」と延長の提案をしてきさえした。もちろん、これは彼らの日本観光への熱意による部分も多分にあるのだろうが、普段の生活の違いも大きいと思った。ディスカッションのテーマの1つで平均的な1日の過ごし方を円グラフに書いて発表するアクティビティがあったが、ロシア人の多くは гулять (グリヤーチ、散歩) が数時間入っていた。散歩といってもただ歩くのではなく、時には友人と話しながら、時には気の向くままに店を覗きながら、歩くそうだ。日本語では散策、という語感がむしろ近いかもしれない。長い人では毎日5時間ほど散策する人もいた。田舎から来たからよく歩くのだろうと言っていた日本人参加者もいたが、リヤザンは地方都市とはいえども、50万超の人口を擁する、それなりの規模の町である。日本で同規模の都市で、同じようなライフスタイルを送る人は恐らく少数派であろう。環境の違いが暮らし方に与える影響はあるだろうが、彼らの散策中毒具合には長く根付いた習慣や、内面の違いが大きいような気がした。彼らの体力の無尽蔵さをきっかけにライフスタイルの違いが垣間見えたことは、自分にとって新鮮な発見であった。

こうした違いは些細である故に、長く訪日企画に参加する人は、多く参加するほど得られるものが多いと思った。来年度以降に参加する人には、ぜひなるべく多くの時間を一緒に過ごすことをお勧めしたいと思った。

阿部有希子

今回、訪日企画の中で一番印象に残ったのは、1日目の午前中に行ったディスカッションだ。ディスカッションの内容は、流行のファッションについてと、理想の指導者についてだった。ロシアのファッションについて、意外だったことは、私が一緒に話したロマンさんがいうには、ロシアでは金髪にすると派手で頭が悪いと思われるらしい。また、理想の指導者についてのディスカッションでは、ロマンさんは、ほとんどのロシア人はプーチンを恐いけど尊敬する対象として見ていると言っていた。なんでも、ロシア人は指導者が国に招く結果の良し悪しとは関係なしに、自分たちの指導者が世界で一番で、それは、自分たちの指導者だからだ、と考える傾向にあるらしい。国民にそう思われていると指導者も動きやすいのではないだろうか。

蓮田柚香

ファッションと理想のリーダー像というふたつのテーマについてディスカッションをしたことが印象に残っている。ファッションは特に制服に絞って話したが、女子でもズボン着用可である点は日本ではなかなか浸透していないことであり、日本の制服文化がいかに独特かが改めて分かって興味深かった。

このように、ディスカッションを通じて自国のことを再認識することが出来て、非常に有意義な時間だった。またロシア人との交流はロシア語の勉強のモチベーションにもなるので、積極的に参加していきたい。

弓取奨平

今年も訪日企画に参加して、ロシア人と交流ができてよかった。去年は、ロシア語でまったく話すことができなかったが、今回は少し話すことができて成長を感じられてよかった。ロシア人が、日本の何に興味があるのか、欲しいものや、好きなものを知ることができてよかった。来年以降も訪日企画を行って日本とロシアの良い交流が続いてほしいと思った。

鈴木陽介

今回の訪日企画に参加をして、リヤザンの人たちと沢山会話をしたり、色々な場所を巡ったりして、とても素晴らしい経験になった。会話に関しては拙いロシア語ではあったが、なんとか通じたので良かった。自分は、半年間ロシア留学へ行くので、出発前に良い会話のトレーニングが出来たなと思った。今回の訪日企画での経験をロシア留学でも活かしていけるように、頑張りたいと思う。

南谷成貴

私は、多くの日に参加した。特に、ディスカッションの日は「異性の口説き方」というやや異質ではあるが、最も取っ付きやすいであろうテーマを担当した。会話のほとんどは他愛もない会話だったが、ゲストを楽しませることができたので、よかった。日本において、ロシアの、それも近い歳と交流する機会は限られてくるので、このようなイベントは大変ありがたい。また、ロシア語学習のモチベーション向上や維持につながったし、向こうの生きた情報を知れた。

水田隆介

ロシア語を学び始めて数ヶ月程度での訪日企画への参加だったため不安要素が大きかったが、ロシア語に堪能な諸先輩の助力を得て、さらにロシア人からの積極的なアプローチも有り有意義な時間を過ごすことができた。私自身は一部の訪日企画のみの参加であったが、BBQ で共に火を起こして肉を食し、お守りとしてロシアの通貨を頂戴するなど言葉を用いらないコミュニケーションもあり、十二分に楽しむことができた。ディスカッションにおいては日本とロシアの学生事情を比較した。また、私の持参したロシア語会話の本の内容の検討で大いに盛り上がった。ロシア語をある程度聞いて理解することはできたが話すことができなかったためロシア語学習への意欲が高まった。

石井廉史郎

私が参加した訪日企画の中でも特に印象に残っているのは、ディスカッションである。ロシア語を学び始めてまだまもなく、ロシアにもあまり詳しくない私にとって、今回のディスカッションはロシアやロシア人の事情について直接聞いたり、日本のことを質問されると自分の国について改めて考えたりすることができ、非常に良い機会だった。正直、まだまだロシア語を話せるとは言えず、英語もままならない私は、ロシア人と意思疎通ができるか不安だったが、優秀な先輩方のロシア語能力とロシア人の方々の日本語能力に大きく助けられて問題なくディスカッションに参加でき、本当に良い経験になった。

伊賀慎太郎

私が参加したのは、バーベキュー、浅草、ボウリングと渋谷の三日間である。バーベキューの日にロシア人と初対面となった。彼らは日本語が話せる人も、話せない人もいたが、いずれの人も日本文化に触れたいという意志が強いことを感じた。私は、浅草の日のディスカッションでスピーチをしたが、先輩の訳してくれたロシア語の台本をつたない発音で読み上げるのがやっつとであった。しかし、ディスカッションは興味深いことをロシア人と話し合えたので、良い経験であった。

高柳りさ

一緒に様々な場所をまわることで、どれだけロシア人らが積極的に日本を知ろうとしているのかが分かった。ロシアの方々には日本のあらゆる事に興味をもっていた。それは文化であったり、歴史や言語であったり、親日家が多いという言葉に確証をもてた。私は今までロシアについての様々なものを知ることが目標としてきた。しかし相手側に歩み寄るには日本の何がロシアの方々に影響を与えているのかを知り、それに応じて交流することも重要だと気がついた。

田原歩実

今までの私の異文化交流に対するイメージは、自分が交流する場へ行ってあらゆる文化を感じ、得られるものだと思っていた。しかし、今回ロシア人を招くことで、招く側として感じられたこともある。ロシアにない日本独自のものを紹介したいという気持ちから秋葉原や鎌倉といった日本独自のものを彼らに見せることができた。そこでは日本人として紹介したいこと、この交流をきっかけに知ってほしいことをロシア人たちがどう感じるか想像しながら企画できたことが今回の異文化交流の本質だと感じた。そしてロシア人たちが日本を楽しむ姿を見ることができた。

野々村樹

ロシア人と聞くとむっつりとした面構えで話しかけづらいなんて印象を持っている人も多いのではないのだろうか。少なくとも私はそうであった。そのようなことから、コミュニケーション第一のこの企画がどうなることかと思っていた。しかしその不安はすぐ解消された。訪れた面々が陽気で話しかけやすかったからだ。面白く有意義な交流が出来たと思う。以下主な知りえた事を羅列する。

- ・日本語より英語の方がうまい。
- ・サブカルチャーが（少なくとも日本に来る人は？）好き。
- ・散歩が好き。

今後もこのような機会があれば積極的に参加したい。

Kirilina Viktoriya

今年私は他のロシア人の皆と一緒に日本へ来ました。その前に日本へ行ったことがなかったので、初めてのことでした。私にとってそれは忘れないことです。私達は色々な所へ行ったり、遊んだり、おしゃべりしていました。私にとっては全てが面白かったのですが、一番面白かったのは上野動物園でした。動物もたくさんいて、緑も多いし、とても綺麗な所です。その上皆と一緒にすることがすごく良くて、楽しかったです。日露のおかげで日本についてたくさん新しいことを教えてもらいました。そして、日本人の生活が分かるようになりました。旅行の前は日本とロシアが全然違うと思いましたが、その後で似ている所もあると分かりました。また日露のおかげで私は新しい友達と仲良くなりました。不思議なことに、ロシア語とロシアの歴史に興味がある日本人が多いと分かりました。そしてロシアに住みたい日本人もいることに、私はとても吃驚しました。私にとって変なことですが、素晴らしくて、面白いと思います。その人が私にロシアについてたくさん新しいことを教えてくれました。私はこれからも日露に参加したいので、日本語を一生懸命勉強したいです。そして日露に参加している人がもっと多くなったら嬉しいです。

Umarova Angelina

今年まで、訪日だけではなく海外旅行の経験が全然ありませんでした。日本に来て生活や文化や日常の会話などの体験をしてとても面白くて楽しかったです。日本の生活はロシアと比べたらたくさんの方が全然違います。ですから訪日は他の惑星に行くような感じでした。東京は人が多くて素晴らしいです。実は「迷ったら帰ることができない」と思って時々恐い思いをしました。不思議なことに日本ではロシア語とロシアの文化を一所懸命頑張って勉強している学生が多いとわかりました。素晴らしいことだと思います。次の日露は一所懸命頑張っている参加者がもっと多くなったら嬉しいです。

Sinev Roman

今年、再び日露に参加して日本に行きました。今回は五回目の訪日ですが、何回も日露に参加して日本へ行ってもつまらなくなりません。いつも新しい経験をたくさん貰います。訪日の企画はいつもと同じく面白かったです。今年のホームステイは初めて学生の寮ではなくて家に泊まりました。ホームステイの家族のお陰で日本の家族の日常生活の体験をしました。言語のことは日常の会話の可能性がたくさんありました。ホームステイの家族のお陰で色々な面白いことができました。また例えば和食や和室や温泉などが大好きでも、日本にしかありません。ですから日露のお陰で日本に行くことができ幸せです。でも一番必要なことは人のコミュニケーションだと思います。日本語の勉強のために直接コミュニケーションする体験が必要だと思います。日露では言語や文化の勉強だけではなくて、友好のことも必要だと思います。日本に来て前回の日露の友達に会うことができ幸せです。いつも日露のお陰で新しい友達ができ幸せです。ですからできるだけ日露の参加を続けたいと思います。

Dashkova Tanya

This summer I have been in Japan for the first time in my life, and it was an unforgettable experience for me. Everything was so unusual and exciting, and I enjoyed every single minute out there. My host family was really kind to me, and I want to thank them with all my heart. They helped me to get used to the new surrounding and they showed me many interesting places and events in Japan. Also I want to thank all the Japanese students who spent these ten days with us, because they helped us a lot when we needed it, they explained everything we didn't know, and they did their best to make this Nichiro truly amazing. We have visited a lot of interesting places in Tokyo, such as National Museum of Nature and Science, Asakusa, Akihabara, and many others. We went to the karaoke, and I really liked it, because we don't have such karaoke clubs in Russia. We also went to the sea, and all of us enjoyed it a lot, because we have been to the sea a long time ago. Kamakura is a very beautiful place, and the weather was nice, so it was a perfect trip. The only thing I'm a bit upset about is that I didn't know Japanese very well, so sometimes it was quite hard for me to communicate. But I hope that it wasn't the last time I went there, and I will study harder, and next time I will be able to do it better. I'm sure that one day we all will meet again and will have a good time together!

今年の夏、私は人生で初めて日本へ行ってきました。それは私にとって忘れられない体験となりました。全てのものがとても珍しく刺激的で、全ての時間が楽しかったです。私のホストファミリーは本当に親切でした、心からお礼を言いたいです。彼女たちは私が新しい環境に慣れる手助けをしてくれたり、たくさんの興味深い日本の場所やイベントを紹介してくれたりしました。私は10日間を共に過ごした日本人学生たち皆にもお礼を言いたいです。なぜなら彼らは必要に応じて手助けをしてくれたし、知らなかったこと全てについて説明してくれたし、「日露」を真に素晴らしいものにするよう最善を尽くしてくれたからです。私たちは国立科学博物館、浅草、秋葉原などといった東京の興味深い場所をたくさん訪れました。私たちはカラオケに行きました。ロシアには日本のカラオケのようなお店はないので、とても気に入りました。私たちは海にも行きました。海に行くのは久しぶりだったので、皆とても楽しんでいました。鎌倉はとても美しいところで、天気も良かったので最高の旅となりました。唯一私が少し戸惑ったことは、私が日本語のことをよく知らなかったことです。そのため時々コミュニケーションを取ることが難しかったです。しかし、今回が日本に訪れる最後の機会というわけではないと信じています。勉強をもっと頑張ります。次回をもっとうまくやれるでしょう。私はいつかまた皆で会って一緒に楽しく過ごせると確信しています！

Gasko Aleksei

日本で過ごした 11 日間は私に強い印象を与えました。一番びっくりさせたのは日本人の礼儀と懇切です。ロシアではそんなことがめったにありません。ある本で読んだのは日本の社会に二つの面があることです。それは「表」と「裏」です。日本に行ったことがある同僚と知り合いが何度もそんなことについて話して、日本人が外国人に「裏」を見せないようにしていると言いました。しかし、私の新しい日本人の友達の家泊まった間、その「裏」のことが自分の目で少し見られました。日本人の友達を困惑させないために、それについて詳しく説明しませんが、一つのことだけ話したいと思います。私にとって、日本の赤貧とごろつきがヨーロッパのプロレタリア（現在、ルンペンプロレタリアートではなくて、プロレタリアと読んだほうが良いと思う）より何倍も尊敬に値します。

日本人は素晴らしい民族です。日本の人口密度は巨大ですが、日本人は何となく次のことができます。

- 1)日本人は外で騒ぎません。(ラッシュアワーにも公園で大勢の人が集まっても、セミの鳴き声が聞こえます。)
- 2)日本人は他人に迷惑をかけません。
- 3)ロシアっぽく言えば臨時の迷惑をかけずに、日本人は社会のために働きます。

そのことについて簡単な例をあげます。

それは月曜日の夜、吉祥寺に起こったことです。譲治さんの家へ行く道で工事のために準備された場所に気づきました。大切なのは、譲治さんの家からその工事場所まで 40-50 メートルだけだったことです。晩ご飯を食べてからベッドへ行きました。部屋の中は暑かったですから、窓を開けました。セミの鳴き声を聞きながら、寝ました。私は眠りの浅い人ですが、夜中に何も聞こえませんでした。朝起きて、朝ご飯を食べて散歩へ行きました。昨日の晩、平らだった所に建築されている建物がもう三階まで建てられていました。そばに建築材料もゴミもなかったし、建築の場所は垣で囲んでありませんでした。屋根がありませんでしたが、3階だけ建てられました。間もなく、残りの2階が建って、屋根もふきました。新しい建物はフィルムにかぶせられて、その中で建設者が働きました。そして、建築のプロセスが全然騒がしくありませんでした。このような例がいくつもあげられますが、この感想で全てのことが話せないかもしれません。ありがとうございました！



第 3 章 訪口企画

3. 1 訪口企画について

3. 1. 1 企画概要

企画名	第29回日本ロシア学生交流企画 —第19回関東本部主催訪口企画	
主催	日本ロシア学生交流会 関東本部	
共催	日本ロシア学生交流会 ノヴォシビルスク支部	
助成	公益財団法人 平和中島財団	
実施期間	2016年8月14日～8月25日	
参加人数	関東本部	10名
	ノヴォシビルスク支部	10名

3. 1. 2 主な企画内容

●ホームステイ

日本人メンバーはロシア人メンバーの家庭にホームステイをした。実際にロシア人の家庭で生活を共にすることで、仲が深まっただけでなくロシアの生活を体験することができる良い機会となった。今回、私たちを受け入れて下さったロシア人メンバーに心から感謝を申し上げたい。

●都市散策・交流企画

テーマパークなどの観光地に加え、珍しい博物館など様々な場所を見学した。ロシア人メンバーの案内によって通常の旅行では行かないような場所を見学することができ、ロシアの新しい一面を見ることができる貴重な機会となった。

また、日々の企画を通じて相互に理解と親睦を深めることができ、日を追うごとに交流も充実したものになっていった。

●報告書の発行

様々な企画の活動内容や日本とロシアの学生による交流を通して得たものをまとめ、本会の活動意義について報告するため、本報告書を編纂する。

3. 1. 3 交流都市紹介

今回の訪口企画で訪れたのはノヴォシビルスクである。

ノヴォシビルスクはノヴォシビルスク州の州都で、シベリアの中心都市である。モスクワの東 3191km、西シベリア平原に位置している。平均気温は年間を通じて+0.2℃であり、7月で+19℃、2月で-19℃となっている。人口はロシア国内第3位の約158万人であり、近年もこの人口は増加を続けている。この街を中心に鉄道および道路が数方向に延びており、交通上の結節点となっている。

ノヴォシビルスクの起源は1893年にシベリア横断鉄道建設の過程で生まれたノーヴァヤデレヴニャという街である。その後何度かの名称変更を経て、最終的には1925年に新しいシベリアの都市という意味のノヴォシビルスクに名称変更された。

何もなかった場所でノヴォシビルスクが急成長したのは、シベリア横断鉄道とオビ川の水路が交差するという地理的優位性にある。街の創設から70年未満で人口が100万人を超えたのは世界でも最速で、ギネス記録にも認定されている。ソ連時代に政府がシベリア・極東における研究開発などの拠点として位置づけたことに加え、第2次世界大戦中には多数の工場や住民が疎開してきたことから、その発展は加速された。

ノヴォシビルスクはロシア東部のビジネス、商業・金融、工業、学術、文化の中心都市であり、シベリア連邦管区の行政・管理機能を有している。ロシアの都市でありながら資源採掘に依存せずに発展しており、工業的には航空機や原子力工業をはじめとする加工・知識集約型部門が中心である。1990年代後半からは商業も発展しており、2007年には巨大商業センターも開業した。

ノヴォシビルスク大学など多数の高等教育機関や研究所が集積している。街の中心から南28kmの場所にはアカデミーチェスキーゴロドク(アカデミー小都市)も存在する。

1990年に北海道札幌市と姉妹都市連携を結んでいる。



《参考文献》

竹内啓一ほか編 (2016) 『世界地名大辞典5 ヨーロッパ・ロシアII』 朝倉書店

Official website of the city of Novosibirsk (2016) 『General Information』

<<http://english.novo-sibirsk.ru/>> 2016年9月17日閲覧

3. 1. 4 プログラム日程

8月 14日 (日)		日本人メンバー 日本出国
15日 (月)	8:45	日本人メンバー トルマチョーヴォ空港着
	14:50	ウォーターフロント散策
	16:00	歓迎会
16日 (火)	12:30	ノヴォシビルスク動物園見学
	18:00	夕食
17日 (水)	12:00	アカデムゴロドク集合
	13:00	科学技術博物館周辺散策
	16:30	夕食
	17:30	植物園散策
18日 (木)	11:30	カリーニン広場集合
	12:30	世界葬儀博物館見学 火葬場の記念公園散策
	16:00	レーニン広場
	16:10	夕食
19日 (金)	12:00	歴史博物館集合
	12:30	古代のシベリア展覧会見学
	14:00	テーマパーク
	15:00	昼食
	16:00	ガリレオ見学
20日 (土)		グループ別行動
21日 (日)		ファミリーデー
22日 (月)	11:00	スケート
	12:00	昼食
	14:00	乗馬体験
23日 (火)	12:30	レーザータグ
	15:30	さよならパーティー
24日 (水)	11:30	劇場前集合
	12:00	劇場見学
	14:20	昼食
	23:00	日本人メンバー ロシア出国
25日 (木)		日本人メンバー 成田空港着

3. 1. 5 参加者一覧

●関東本部

氏名	大学	学年
木村冬馬	東京大学	2年
河野一輝	東京大学	2年
石川智也	上智大学	2年
鶴見百英	上智大学	2年
藤田梨佳子	上智大学	2年
古川怜雄	上智大学	2年
南谷成貴	法政大学	2年
伊賀慎太郎	上智大学	1年
細谷日乃花	上智大学	1年
須藤瞳	津田塾大学	1年

●ノヴォシビルスク支部

氏名	大学名	受け入れ
Suprunenko Elena	—	南谷成貴
Belov Stepan	—	古川怜雄
Chichkin Vladimir	ノヴォシビルスク国立工科大学	河野一輝
Agafonov Timofei Chennyshova Angelina	ノヴォシビルスク国立工科大学	木村冬馬 伊賀慎太郎
Smirmova Ksenia	—	鶴見百英
Poltorykhina Vlada	ノヴォシビルスク国立教育大学	須藤瞳
Krivyh Valentina	シベリア国際関係及び地域学大学	藤田梨佳子
Serova Ekaterina	—	細谷日乃花
Builuk Maria	ノヴォシビルスク国立医科大学	石川智也

3. 1. 6 会計報告

●収入

項目	内訳(単価)[円]	人数[人]	小計[円]
自己負担金	76,030	10	760,300
自己負担金	10,000	10	100,000
自己負担金	1,080	10	10,800
自己負担金	4,000	1	4,000
助成金	10,000	10	100,000
合計[円]			975,100

●支出

項目	内訳(単価)[円]	人数[人]	小計[円]
航空券代	86,030	10	860,300
現地でのホテル代金(1泊分)	10,000	10	100,000
旅行手配手数料	1,080	10	10,800
ビザ発行手数料	4,000	1	4,000
合計[円]			975,100

(文責：会計 笠原大生)

3. 2 滞在記録

8月14日

日本からノヴォシビルスクに行くためには、ウラジオストクを経由しなければいけないので、訪ロー日目は、成田空港からウラジオストクへの移動の日であった。成田空港からウラジオストクまでは約2時間35分程度で到着した。私は、日本とロシアの想像以上の近さにとても驚いた。ウラジオストク空港を出ると、日本と同じくらい湿度が高く、ムシムシしていて暑かった。ロシアはもっと涼しいのでは？と思っていたのでこれにも驚いた。そして、ウラジオストク空港からホテルまでは、ホテルのスタッフの方が送迎してくれた。ホテルまでの道のりは、道路が綺麗に舗装されていないので車はとても揺れるし、ホテルのスタッフの方は、ロシアに速度制限はないのか？と思う程のスピードで運転していた。まだ空港からホテル間しか移動していないのに、既に驚きの連続であった。ホテルに到着してからは、ホテルで夜ご飯を食べることもできたのだが、初日の時点で私は、お金をルーブルに両替しておらず、ドルしか持っていなかったので食事は諦め、これからのロシアでの生活に期待を膨らませながら翌日の3時起きに備えて就寝した。

(文責：細谷日乃花)

8月15日

当日は朝3時起きであり、ウラジオストクからは5時発の飛行機に乗る予定であった。しかし、搭乗時刻を過ぎたにもかかわらず、一向に搭乗が始まらない。結局数十分遅れで搭乗となる。日本からウラジオストクへの飛行機とは違い、アナウンスはロシア語と英語のみである。約六時間のフライトを終え、私たちはついに、ホームステイ受け入れ先の人々と対面する。これから10日間過ごす人だ。もちろん緊張する。私のホームステイ先の人は、ティモフェイとアングリーナという人々であり、笑顔で迎えてくれた。彼らは英語に堪能であるため、私の緊張は少し和らいだ。他の人々も緊張の面持ちで対面していたが、挨拶をかわすことで、緊張が多少なりともほぐれたようだ。そして、私と木村冬馬さん、ティモフェイ、アングリーナの四人はタクシーに乗り込み、彼らの自宅へと向かう。その道中、ほぼ会話はなかったが、私は初めて見るロシアの街並みを見ていた。町中にある看板は、すべてキリル文字であり、自分がロシアに来たのだということを改めて実感させられる。その後数十分で彼らの家に到着する。家はちょうど良い広さであり、片付いていた。彼らとともに朝食を食べ、テレビを見た後、ウォーターフロントへと向かう。ウォーターフロントには古い橋がありそこで、皆で記念写真を撮った。ロシア人たちは、自撮りにこだわるようで、結構時間をかけていた。そのあと川沿いに歩き、遊園地のような場所に着く。途中の店で飲み物を買ったが、店主がお釣りを、いちいち店の中に取りに行っていたのが印象的であった。遊園地では、観覧車に乗った。なぜか日本人三人で乗ることとなったが、他の皆も楽しそうにのっていた。その後は歓迎パーティーということで、ボードゲームのできる店で皆でゲームをした。ゲームのルールを理解するのは難しいものであったが、楽しくゲームをすることで皆の親睦が深まった。

(文責：伊賀慎太郎)

8月16日

この日は最初にメンバー全員でノヴォシビルスクの動物園に行った。ロシアは自然に溢れており、土地も広大なので、期待した以上のものに会った。道幅は馬車が通れるほど広く、一つ一つの檻ではまるで野生の環境を再現したように広大な土地や植物が用意されており、動物は日本ではあまりみられないほど皆頻りに動いていて臨場感たっぷりであった。例えば白熊は、日本でもあまり見られないような元気で道を右往左往して、その図体のでかさと俊敏さをみせつけていて、我々を驚かせ喜ばせた。また熊はやはりロシアで絶大な人気を誇っているのか、他の動物に比べて多くの種類が保管されており、ロシア人たちが次々に熊に向かって『ミーシャ』または『ミーシュカ』と呼びかけているのは面白い光景だった。他にも檻の外に紐を垂らし、客が餌を巻きつけていくと引っ張り上げて檻の中に持って行ってしまう賢いゴリラもおり、子供達と戯れる姿が微笑ましかった。珍しいものでは、ベンガルトラやフェネックなど様々な魅力的な動物が目白押しで、5時間以上動物園内を見回っていたが飽きることはなかった。最後は動物園内にある屋台でシャシリクを食べたが、やはりそこはロシアンサイズ、結構ボリュームで長時間歩いた疲れが吹っ飛んでしまうくらいお腹は膨れた。

動物園を出た後は皆でコリヤダと言うところに行き晩御飯を食べた。そこではロシアの伝統的料理ボルシチやペリメニが提供される他、モルスというロシアでは一般的な飲み物も飲んだ。自分はモルス初体験だったが、甘いながらもすっきりと飲める味でありいくらでも飲み、日本でも普通の飲食店で販売してほしいと思うレベルであった。また食事中も店の歌手がロシアの歌を歌い始め、日本人とロシア人双方とも楽しんだ。

歩き続けたので足は疲れたが、ロシアの自然の偉大さやロシア人の動物への愛情の一端を垣間見られて総じて満足度の高い1日であった。

(文責：河野一輝)



8月17日

この日はファミリーデー。ノヴォシビルスク市内を観光案内してもらった。前日、夜遅くまでパーティーをしていたこともあり、一日が始まったのは午後になってからだった。

最初に向かったのは「Я из Сибири」と書かれた壁。「私はシベリア出身だ」という意味だが、なぜそう書いてあるかは不明だった。

オビ川の近くに来ると、ソ連製の機関車が展示してあった。車体は爽やかな水色、車輪などの下部は赤、正面は黒で彩色してあり、センスのいいデザインだった。立ち入り禁止の所で集合写真を撮っているところを警察に見つかり、面倒なことになるのを心配したものの、意外なことにニコニコして許してくれた。

昼食は、道端によくあるチェーン店のブリヌイ。濃厚なチーズとハムにクミンがよく利いていて、とても美味しかった。店員があつという間に焼き上げていくのが圧巻で、デザートにもう一つ、ナッツとキャラメル入りブリヌイを買ってしまった。

午後は本屋へ。著者のキリル文字アルファベット順に本が並んでいるのが面白かった。大きな書店ではCDや盤上ゲームも売っていて、思わずロシア語版のクロスワードのゲームを買ってしまった。

夕食は家で作ってくれた。トマトサラダとハンバーグ、そしてビールとウォッカ。ロシア人はビールを水のように飲み、ウォッカをビールのように飲む。遺伝的にアルコールに強いのがよく分かった。

ビールを量り売りしている店にはトランプもあつたらしく、一セット買ってきてくれた。ロシアの伝統的なトランプには数字の2〜5とジョーカーが存在せず、36枚入りだと聞いて驚いた。せっかくなので遊んでみたい、ということで、ドゥラーク (=「馬鹿」) という遊び方を教えてもらった。一ターンごとに選ばれた一人をその他全員で攻撃する、最後まで負け残った者がドゥラークと呼ばれる、という恐ろしい遊びだったが、これがロシア語圏では最も一般的なトランプゲームらしい。面白い異文化交流だった。

(文責：木村冬馬)

8月18日

この日の最初の目的地は「火葬博物館」だった。行く前は、予定表を見て、「火葬博物館」というその奇妙な名前から「仮装」などとのうち間違えなのではないかと考えていたが、現地に着いてみると本当に葬儀関連の博物館であった。入り口の近くのロータリーには本物の墓があり、そのようなものがあるところを博物館としてしまっているのかもしれないと驚いた。敷地内の展示場は二つあり、一つめは昔のロシアの葬儀の様子がマネキンなどを使って再現されていた。家族を失い悲しむものの泣き顔もしっかり再現されており、だいぶ悪趣味な展示物であると感じた。当時は死人をまるで生きているかのようにポーズさせ写真を撮るのが流行していたらしく、そのような死後記念写真も多く展示されていた。

もう一つは、ソ連時代の生活用品などが展示されていた。ソ連色の強いポスターや商品等、日本では見ることができないようなものを見ることができた。その後私たちは街に戻り、寿司レストランに行った。寿司レストランの寿司は、寿司というよりおにぎりにサーモンが乗っているような感じで、ロール寿司も、カリフォルニアロールに遊び心を付け加えたようなものであった。それでも米に飢えていたのでとても美味しく感じた。その後私たちはレーニン広場に向かった。途中の道に何台もの戦車があったので、私たちは記念に写真を撮った。8月18日という終戦記念日に近い時期にロシアのシベリアで戦車の上に日本人が登っているということは実に感慨深いことであると感じた。

(文責：藤田梨佳子)



8月19日

この日は最初に、ロシアの地域博物館へと向かった。博物館内では古代ロシアの石器や飾り、衣装など様々の展示がなされており、やはり寒い気候の為か日本のよりも分厚い衣装などが特徴的で違いが現れていて面白かった。

それが終わった後はみんなでスタローバヤ、日本の食堂に当たるところに昼ご飯を食べに行った。そこではショーケース内の食べ物を店員に頼んでとってもらうのだが、料理の種類や注文方法がよくわからず最初は非常に苦勞し、結局ロシア人に手伝ってもらった。料理を運んだ後はファミリーデーに別荘であるダーチャに行くことが決まっていたのでそのことについてロシア人と話し合った。日本で初めてダーチャのことを聞いたときはなぜそんな高価そうなものを皆買うのか不思議でならなかったが、あちら側としてはダーチャもピンキリでそんなにお金をかけることもなく買うこともできるらしく、また喧騒甚だしいところに住んでいる身としては休み期間中に心身共に安らぐことができるダーチャは必要だと熱弁してくれ、いかにロシア人にとってダーチャが憩いの場として必須の場となっているかを垣間見られた瞬間であった。

食事を食べ終わると、今度はガリレオという科学技術博物館みたいなところに入った。そこでは空気砲やトリックアートなどがあり、珍妙な装置を楽しんだ。特に後半体験した地面が常に傾いていたり上下逆さまになっている家に入ったときは全員がはしゃいで写真を撮ったりポーズを決めたりして盛り上がった。自分自身もそのようなものを日本で経験したことがなかったので我を忘れて思いっきりはしゃいで何度もこけてしまった。これらを抜けると今度は暗い部屋のなかで鎖とゴムの見分けをつけながら進み、周りに鏡が設置されてどれが通路なのか手探りで進んで行く脱出ゲームの様なところに入り込んだ。自分的にはここが一番面白く、特に鏡の合間を進んで行くところはみんながみんな迷って何度もすれ違ったり本物が確かめあったりして楽しんだ。

柄にもなく子供っぽくはしゃいでしまった1日であったが、本やネットで知ったのとは違う変わった体験ができて非常に満足だった。

(文責：河野一輝)



8月20日

訪口企画7日目は、トムスクで行われた“Siberia Otaku Saiten” (SOS)に行ってきた。SOSとはロシアで有名な、漫画、アニメのイベントである。当初の予定では、ノヴォシビルスク国立教育大学で文化について議論が行われるはずだったが、予定が変更され、いくつかのグループに分かれて行動することになった。トムスクはノヴォシビルスクから北へ、車で3時間ほどの場所にあり、ノヴォシビルスクに比べかなり寒かった。ホストファミリーによると、トムスクは学生の街であるらしく、たしかに、ノヴォシビルスクよりも街の雰囲気落ち着いているように感じた。イベント会場では漫画やイラスト、手作りの小物の販売が行われ、コスプレをしている人が多くいた。ロシアではアメリカや日本の漫画がかなり人気で、会場で売られていた漫画やコスプレも見覚えのあるものが多かった。メイドカフェも出店されていて、そこではたこ焼きやおにぎりなどの日本食が売られていた。私はたこ焼きと団子を食べてみたが、どちらも日本のものとは大きく異なっていた。特に団子は日本の団子のようにもちもちしておらず、固めたごはんに甘いシロップをかけたものようだったので、正直、おいしいとは思えなかった。同じ料理を作ろうとしても、国が変わると完成品は大きく変化することを知った。ステージでは劇、コスプレ大会、アニソンのカラオケ大会が行われていて、どのステージもとても盛り上がっていた。劇はもちろんロシア語で行われたため、日本人メンバーはほとんど内容を理解することが出来なかった。この体験によって、ロシア語学習へのモチベーションが更に高まったように感じる。ロシアのオタク文化について知ることが出来た一日であった。

(文責：須藤瞳)

8月21日

この日はファミリーデーでステイ先のエレナの家族と共に、ダーチャへと連れて行ってもらった。向かったダーチャはエレナの姉の夫の両親のダーチャだった。なんでも、ステイ先のダーチャはまだ新しく、もてなすことが難しいとのことだった。ダーチャがどんなものであるかは前もって、調査済みであったが、行くのは初めてだった。行ってみて驚いたのは、まずダーチャ地区なるものがあるということ。個々の家庭で、別々な場所に、あるのではなく、一つの地区に、各家庭が所有するダーチャが集まっているのだ。そして、ダーチャ地区も街の一つではなく複数存在するようだ。各ダーチャはトタン板や簡易的な柵などで、仕切られていて、小屋、ダーチャによっては家があり、野菜や果物の自家栽培を行っていた。ちなみに、これらの建築物は全て自分で作るそう。業者に頼めたりもするが価格が非常に高いらしい。ダーチャに着き出迎えてくれたのは、先に述べた、エレナのお姉さんとその娘、エレナのお姉さんの夫の妹さんとその息子（イゴーシャ）、そしてエレナのお姉さんの夫のご両親であった。全員初対面にも関わらず、快く迎えてくれて嬉しかった。準備にしばらくかかるとのことだったので、近くにある、池に案内してもらった。カモがいるとのことだったが、あいにくその時は姿が見えなかった。戻るとすぐに夕飯が開始され、自分の誕生日が近かったために、祝って頂いた。自家製シャッシュリークはとてもおいしく、他のサラダや、自家栽培の野菜などもみずみずしく、どれもおいしかった。伝統ということで、ウオッカのショット飲みもしたが、なかなかキツイものがあった。しかし、向こうの、お祝い？の仕方とのことで、悪い気はしなかった。別れ際には、見送って頂き、また来いよと言ってくれて終始いい気持ちしかなかった。家に帰り、エレナさんが好きなアニメ、「NARUTO-ナルト-」の映画を朝に続いてもう一本鑑賞した。

(文責：南谷成貴)

8月22日

この日のスケジュールは、ショッピングモールのリンクでアイススケートをし、各自ショッピングをした後全員で乗馬場に行くというものだった。自分を含め、日本人はスケートをするのが初めての人が多かったが、ロシア人の中にもスケートは人生で数回目という人もいて、日本人もロシア人も同じように転びながら協力して楽しんだ。ショッピングモールの中にアイススケートのリンクがあるということ自体にロシアの文化を感じた。

また、まだ小さい女の子が厳しい母親の指導を受けながらスケートを本格的に練習していて、小さい頃からの指導と、身近にリンクがあるという環境が、ロシアで素晴らしいスケート選手が生まれ出される理由の1つなのだった。

私達がスケートを楽しんだメガ (Mera) という大きなショッピングモールには、主に外国系の店が並んでいる。中にはマトリョーシカ等売っている店もあり、ロシアらしい土産を買った人もいた。また、昼食はこのモール内のレストランで摂った。スーパーで食材などを買い、メンバーが合流し(1日中参加できなかったメンバーもいた)、乗馬場に向けて出発した。

都市部から離れた場所は、ロシアの農村の景色が広がっていた。都市部でもそうだが、ロシアには犬と猫がたくさんいる。ロシア人メンバーに聞いてみたところ、特に犬は番犬として、よく飼われているようだ。

乗馬場では、最初に馬についての知識や乗馬の際の注意点等の指導を受けた。ロシアでは昔から戦争や運搬のために、馬の研究が行われてきたことがよく分かった。

乗馬体験と同時に、バーベキューでロシアの肉料理、シャシリクを焼いて食べた。

また、この日は訪日日本人メンバーの南谷成貴の誕生日であり、ロシア人メンバーからのプレゼントとケーキのサプライズがあった。南谷成貴はこの日の夜出国で日本に帰り、一足先にホストと別れた。

(文責：鶴見百英)

8月23日

8月23日、ロシアに入国した日から数えて訪日10日目であるこの日はレーザータグとさよならパーティーが予定されていた。午前11時20分にカレニナ広場で待ち合わせをし、クラスニ通りを北へ歩くこと約10分、雑居ビルの3階にレーザータグの施設があった。レーザータグとはセンサー付きのジャケットを着用しレーザーガンで狙うというインドアゲームであり、全員が初体験だった。ゲームは個人戦やチーム戦など5試合あり、各々が楽しみながら参加することができた。レーザータグ終了後はさよならパーティーへと向かった。クラスニ通りを南へ歩き先ほど集合したカレニナ広場を過ぎて、地下鉄ガガーリンスカヤ駅近くのカフェが目的地だ。ここでは8月15日に歓迎会を行っている。道中、Улица Кропоткина というバス停付近の屋台で各自が軽食を買い、昼食とした。カフェに着いた我々は1時間ほど飲み物や食べ物を載せた机を囲みながら歓談し、その後はカードゲームなどをして最後のひと時を楽しんだ。明日日本へ帰るということが信じられないほど時が過ぎるのが早かったと感じた。午後8時ごろ、日本とは違いまだ空が明るいうちにカフェを出て解散となった。

(文責：石川智也)

8月24日

到着当初はなんとなくよそよそしかった日本側、ロシア側共にこの日には完全に打ち解けもう何年も友達のようにだった。

さて、この日僕たちはロシアということでオペラやバレエが行われている劇場に連れていってもらった。夏休み期間中ということで実際にオペラ等を見ることが出来なかったが、舞台裏などに連れてってもらいオペラで使われている大道具などを見せてもらったり、劇場全体を案内してもらったりした。さすがロシアの劇場としか言いようがないくらい壮大であり繊細な装飾に感動した。

その後はお昼ご飯に行った。みんなで食べる最後の食事だったがそれぞれロシア人と必死にやりとりしながら思い思いのものを頼み美味しくいただいた。最後はお土産を買うために町の中心部のショッピングモールへ行き買い物をした。

その後一旦各自のステイ先にもどりファミリーと残りの時間を過ごし空港へ。空港に全員が集まってからはあっという間にチェックイン等も終わりいよいよ別れの時がきた。

楽しくロシア語や英語や日本語を駆使して会話する人や涙を流しながら抱き合い別れを惜しむ人それぞれいた。最後にはロシア側からメッセージで埋め尽くされた国旗を手渡され一緒に写真を撮り僕たちはゲートに向かった。それでもわずかな隙間から手を振ったり投げキッスをしたりと10日間という短い時間ながらもそこには確かな友情が存在した。

来年の訪口訪日もこのような素晴らしい経験がお互いできたらなと思った。

(文責：古川怜雄)



3. 3 全体感想

木村冬馬

近くて遠い隣国、ロシアに興味を持ち始めてこのサークルに入ったのが四月。ダメでもともと、と訪ロ企画に応募したところ運良く行けることになり、ロシア語を猛勉強して出発に臨んだ。

まず驚いたのは食費の安さ。アイスクリームは30円未満、手より大きい牛タンに入った昼食が700円程度。どれも美味しく、大満足だった。

ロシア人は気難しい、という話も聞いていたが、実際行ってみると交流先の学生たちも街の人々も気さくで、拙いロシア語でも懸命に聴き取ろうとしてくれた。

ホームステイ先のカップルはロシア人らしく大雑把で、当初は溝を埋めることができなかった。一日の予定が全て立ち消え、日本人だけで中央市場を観光したこともあった。しかし、Ангелинаは笑顔を絶やさず家事をこなしてくれたり、Тимофейは彼女が体調を崩した時に場を仕切ってくれたり、後半ともなれば溝も埋まってきて、ダーチャでの一泊は特に楽しいひとときになった。

昔から海外旅行が好きではあったが、どの旅行でも、十日ほど経つと日本に帰りたくなるのが常だった。今回は特に、大小さまざまなアクシデントもあった。それでも、帰る時にこんなに後ろ髪を引かれたのはなぜだろうか。ロシアの深い懐を実感する、内容の濃い十日間だった。

河野一輝

今回ロシアに行くのは初めてで、しかもホームステイで10日ぐらいいるということで渡航前は心中に大いに不安を抱えていたが、向こうに着いてみるとどの人も気さくで一癖も二癖もある人たちばかりでホームステイ中はずっと楽しめた。またこうやって不安もなく過ごせたのも、こちらのことにいつも気を配ってちょっとした名所を一生懸命に説明したり、何か欲しいものや困ったことはないか聞いてくれたりしたロシア人の並々ならぬ努力のおかげだと思っている。

ノヴォシビルスクは都市化もすすんでおり非常に広大でそこかしこに旧ソ連の建物や観光スポットがあつて、歩いて眺めるだけでも全く飽きを感じさせない素晴らしいところだった。特に中央市場はここで本当になんでも買えるのではないかと思うくらい豊富な品揃えでしかも圧倒されてしまった。

またダーチャの経験も格別で、見晴らしがとても良く豪勢な食事など手厚い歓迎を受け、ホストファミリーの家族とロシア式サウナに入って一緒に友情を深めたのは本当に忘れがたいいい経験だった。

今回の訪ロで得た経験は自分のロシア観だけでなく価値観も変えてしまうような衝撃的な出来事の連続で、これからのロシア学習の大きな糧になると確信させてくれる非常に有意義なもので、さらに深くロシアに関わっていきたくと思った。

石川智也

私が日ロ学生交流会に入った最大の理由はこの訪ロでのホームステイが魅力的だからだった。私は今回が初のロシアへの入国であった。日本ではロシアというと怖いとか暗いといったマイナスイメージが先行しがちであるが、実際にロシアへ行った感想として第一に言えるのは、それらのイメージとは全く逆のことだということだ。私にとってのロシアとはノヴォシビルスクで会ったホストファミリーや仲間たちと過ごしたこの10日間だからだ。ホームステイでお世話になったマリアが言った「ロシア人は顔は怖いかもしれないけど心は優しい」という言葉はまさに的を射ていた。ロシアでは様々なロシア人と交流することができたが、皆から優しさを感じた。夜出歩いても安全な街、ノヴォシビルスクからトムスクへ向かう途中のどこまでも続く草原、そして仲間と過ごした日々。ツアーや個人で観光するだけでは味わえないこの貴重な体験を通して私はロシアのことがさらに好きになった。これからもこの体験を糧として日々ロシア語の勉強に精進していきたいと強く感じた。この訪ロに関わっていただいた全ての方に感謝したい。

鶴見百英

自分は今回の訪ロが初めてのロシアへの渡航であった。2年生にしてようやくロシアに行くことができた。記念の初ロシアはシベリアの大都市のノヴォシビルスク。個人的に気に入ったのは、この都市で市電、トロリーバス、地下鉄等、ロシアで走っている主な交通機関が利用できたことだ。

自分はこの訪ロに、いずれ行く長い留学の足がけのつもりで参加した。短い期間、独りではなくグループで行動を共にするので、楽な旅になるだろうと考えた。しかしホストと共に生活するという点が一番難しかった。独りで住むのとは異なり、ロシア人と住むので必然的にロシア語を使う。何をしたいか、どう感じているか等の意思の疎通をロシア語で出来なければならない。今回はなかなか出来なくて歯がゆかった。しかし逆に、自分は会話の中でどんな表現をよく使い、どんな表現をロシア語で言えないかが良く分かった。ロシア人が使う生きたロシア語の表現もたくさん学び、非常に勉強になった。訪ロの終わりの頃には、大分思いが伝えられるようになった。別れる時には悲しんでくれて、私のホストがこの人で、そして私がこの人の所に行けて良かったと心から思った。



藤田梨佳子

私はこの訪ロという経験を通して大きな成長をした。生きたロシア語に触れることで、ロシア語への理解も深まった。今回はそれだけでなく、ロシアでの生活によって人間として大きく成長できたことを感じている。私のロシア私生活はスタンダードとは言えないことが多々あった。ホストのヴァーリャは日本語が少ししか話せず、話せる日本語も大部分が間違っていた。私自身もロシア語がそんなに出来ないため、二人ともお互いの言語が出来ず意思疎通をどうやってとるべきか困るほどだった。さらに、ヴァーリャは他のホストの子たちとは違い、英語が全く話せなかった。「towel」や「cancel」といった単語すら解らないほどだ。

私たちははじめ言葉で会話することが出来ずお互いの辞書を使ったりしながら、わかる範囲で会話していた。そのため、初日は言葉が使えずお互いの無言、さらに食事はなぜかスープしか出なかったため辛さを感じた。しかし日にちを重ねるにつれ、ヴァーリャにロシア語を教えて貰ったり、周りの人から聞いて覚えたりしているうちにだんだんコミュニケーションが取れるようになり、ヴァーリャにも日本語を教えお互いにお互いの言葉で話ができるようになった。スープしかでなかった食事も、料理の主導権を奪いホストに振る舞うという手段で解決した。また、シャワーが壊れておりバスタブでためた水で体や髪を洗ったり、ベッドがなくソファで二人で寝たりしているうちにたくましさを身につけることが出来た。

過酷なこともあったが、それによって人として大きな成長を得ることができた。訪ロの経験を与えて頂いたことを感謝している。これからもロシア語の勉強を続けたいと強く思った。

古川怜雄

自分にとって今回の訪ロが初めてのロシアで正直不安もあった。

しかし空港で自分たちをロシア人達が迎え入れてくれ、お互いにそんなに上手ではない日本語とロシア語でコミュニケーションを取るうちにそんな不安はどこかにいってしまった。

言葉にするのは難しいが、心からお互いのことを知ろうとする姿勢がそうしたのではないかと思う。

そういった姿勢は今後の日ロだけでなくどんな国と関わる際も最終的に最も重要なものではないかと感じた。

その後の10日間は本当に楽しく、多少のハプニングや、ロシア人特有の遅刻、予定の変更はあったが充実しすぎてあつという間に過ぎていってしまった。

今回の訪ロでロシア人に対して持っていたイメージがいい意味で裏切られた。

ロシア人がどんな人達か簡単に言うことも可能だが、そこは今後みなさんがこういった訪ロという機会や留学など個人的に発見していくことを願っている。

ただ言えることは、ロシアは本当に素晴らしい国で僕たちがこの日ロ関係をより良くしていきたい！もっとロシアを知りたい！と思えるような体験ができたということである。

南谷成貴

ノヴォシビルスクに行くのは初めてで非常に楽しみであった。また、訪口の責任者でもあったので、何事もなく全員無事につけるかどうかという不安、プレッシャーもいづらか感じていたが、全旅程をとおして、穏やかなものであったので安心している。今回の訪口では訪口だからこそ経験できたものが非常に多かったと思う。まずロシア人のダーチャに行くこと自体が、普通の訪口では体験できないことだと思う。そしてロシア式の飲み会。これは非常にカオスではあったが、これもなかなか体験できないものだと思う。受け入れ先のエレナさんご家族も快く迎え入れてくれた。お母さんは非常に愉快な人で、いろいろ気にかけてくれた。特に面白かった出来事が、ご飯を食べていると、最初1、2品だったのが最終的に4品ぐらいに増えるのである。料理も非常においしかった。お父さんの方は、残念ながら接する機会が少なかったが、男飯を作ってくれたり、ウオッカを飲ませてきたりと（悪い意味では言っていない）紳士的に接して頂いた。エレナさんは終始気にかけてくれて、またアニメ好きなどの共通事項もあり、仲良くなれた。率直かつ簡潔に感想を述べれば、最高だった、帰りたい。

伊賀慎太郎

ロシアに行くのはもちろん初めてであり、ロシア語もほとんど話すことができないため、ロシアへ出発するときは緊張していたが、現地に着くとホームファミリーのティモフェイとアンゲリーナが優しく出迎えてくれ、すぐに打ち解けることができた。ティモフェイはいつも気さくに話しかけてくれたため、会話が弾んだ。基本的にかなり余裕のあるスケジュールであり、一日に大抵は一つか二つの施設に行くだけであったが、いずれの場所も非常に楽しいものであり、動物園や、火葬博物館など、普段の観光ではいかないような場所にいくことができた。また、三日目からは、なぜか他のホームステイ受け入れのウラジミールと河野さんが加わり、以降は6人で行動することとなった。6人での生活は楽しい物であり、毎日夜まで話したりして、日に日に仲良くなっていった。最も印象的であったのは、アンゲリーナのダーチャに行ったことである。ダーチャはノヴォシビルスクから電車で1時間ほどの場所にあるが、完全な田舎であり、とてもどこかで心の休まる場所であった。ダーチャにはバーニャというサウナがあり、それに入ってゆっくりとした時間を過ごした。最後の空港での別れは大変つらい物であり、10日間の間にできた絆が深い物であることを感じた。

細谷日乃花

私は高校生の頃、ロシアに興味を持ち、この日ロ学生交流会の訪ロ企画の存在を知った。それからは、大学一年生の時点で訪ロをすることが私の夢だった。そんな、念願かなっての訪ロは、これから4年間かけてロシア語やロシアについて勉強していく私の糧になったように思える。実際にロシア人の家にホームステイをし、共に生活することでインターネットや本には書いてないような、ロシア人の普通の生活について知ることができた。日ロのロシア人メンバーには本当に感謝している。10日間のノヴォシビルスクでのプログラムはとても楽しく、毎日が充実していた。そして特に、ホームステイ先のカーチャには感謝してもしきれない。カーチャは、とても日本語が堪能で、私がロシア語について質問すると、いつも丁寧に教えてくれた。また、カーチャとルームシェアしているサーシャは日本語が分からないので、私たちはロシア語だけで会話をした。私はまだロシア語を勉強して4カ月しか経っていないので、ロシア語だけで自分の考えを伝えることは本当に難しかった。訪ロでの経験を活かして、これから、もっともっとロシア語を頑張らなければいけないと思った。

須藤瞳

私にとって初めての海外渡航経験となったのが今回の訪ロ企画だったため、出国前は不安と緊張でいっぱいだった。終わってみると楽しい思い出ばかりで、なぜ自分はあるなに不安になっていたのか不思議に思えるくらい、素晴らしい10日間を体験することが出来た。ロシアに到着してから最初に驚いたことは、車の運転がかなり荒いということだった。移動手段はほとんどマルシュルートカだったため、最初の数日間は移動時間が怖くて仕方がなかった。車に関しては少し怖い思いをしたが、ホストファミリーはとても親切であったし、ロシアの料理のおいしさ、自然の美しさを実感することが出来て、訪ロ企画に参加する前よりもロシアが好きになった。また、ホストファミリーは、ロシア語が話せない私に対して日本語や英語を使って様々なことを教えてくれた。それに対して、私は自分の思っていることをうまく伝えることが出来なかったのがとても申し訳なかったと思っている。ロシア語をもっと勉強して、またホストファミリーと一緒に話したい。



Suprunenko Elena

はじめまして。グループのリーダー、エレナと申します。今年、私は初めて日露に参加しました。初めての経験なので、すごく緊張しました。日本人学生のために良い雰囲気にしたかったから、ロシアの皆はとても頑張りました。

毎日たくさんの印象が残りました。日本人学生に色々な場所を見せました。面白かったですが、一番大きな印象だったのは火葬場の博物館だと思います。たぶん、そこがソ連時代の博物館であるせいでした。今年の日本人学生はソ連時代をよく知っていますね。でも他の遠足も楽しそうでした。

日本の皆さんは本当に面白かったです。だれでも自由に話すことができました。皆さんは喜んで質問に答えて、自分のことについて色々な話もしました。もちろん初めは恥ずかしかったのですが、最後はそのことも消えました。

豊富なプログラムがありましたので、日本人もロシア人も毎日すごく疲れましたけれども、いい気持ちしかありませんでした。素晴らしい学生が来ました。誠にありがとうございます。

Belov Stepan

この日露で私は初めて外国人に会いました。その前には何も知らなかったのが、ちょっと心配しました。日本人はどんな人なのかと思いました。だって、文化とか国とかが違いますから。

空港で皆に会いました。最初から驚きました。怜雄はロシア語で初対面のあいさつをしました。私は「こちらこそ」とか「よろしく」とかだけ言えました。皆がロシア語を勉強していることは知っていますけど。

初日にウェルカムパーティーをしました。皆はすぐ仲良しになりました。そんな感じで他の日も経ちました。毎日何か面白い所へ行きました。

しかも、ファミリーデーがありました。私の家族は怜雄をノヴォシビルスク州の自然を見に連れて行きました。聖なる泉とか、滝とかへ行きました。私は全てを知りませんでした。きれいでした。

すぐに出発の時間が来ました。なんか、悲しかったです。もうちょっと一緒にいたかったです。私だけじゃない、皆が。

とにかく、すごく楽しかったです！来夏日本へ行きます。誰かに会えるかな・・・

Chichkin Vladimir

今夏の「日露」はすごかったです。私は日本語があまり上手ではありませんから、まず日本人と話すことが難しかったです。二日くらい経った後で大丈夫になりました。日本人と付き合うことはとても面白かったです。付き合っただけで日本語がもっと上手になってうれしいです。

皆さんと色々なことをしたり色々な所へ行ったりしました。ロシアの一番大きい劇場の見学をしたり、葬儀文化の博物館と郷土博物館へ行ったり、動物園へ行ったり、ノヴォシビルスクのセンターを散歩したり、パーティーをしたり、ロシアと日本のパーティーのゲームをしたり、ロシアで作った和食とロシア料理を食べてみたり、ロシアのお酒を少し飲んでみたり、レーザータグに行ったりしました。そしてフェミリデーのときは友達の別荘へ行きました。あそこでシャシリークとピロフを食べて、湯に入りました。

概して「日露」はとても面白くて楽しかったので、私はこのイベントが大好きでした。

Smirnova Ksenia

はじめまして。私はクセニアです。

今年の夏に日ロプログラムに初めて参加しました。私はコースで日本語を勉強しています。しかし、日本語があまり上手ではありませんからプログラムの前はちょっと心配しました。私の家に泊まる人は鶴見百英でした(ロシア語がとても上手です)。私は10日間とも日本語で話してみました。たくさん新しい言葉を学びました。百英さんは文法も教えてくれました。ありがとう。

天気がとても良かったですから朝から夜まで散歩しました。毎日私たちはいろいろなところへ行きました。葬儀文化博物館やオペラバレエ劇場やアカデムゴロドクなどへ行きました。葬儀文化博物館の敷地にソビエト連邦博物館があります。一番楽しいところだと思います。たくさん面白い写真を撮りました。オペラバレエ劇場が一番きれいなところだと思います。

みんなノヴォシビルスクが好きだったと期待しています。

私は疲れましたがとても面白く楽しかったです。素晴らしい経験になりました。いつかもう一回日ロプログラムに参加したいです!

Poltorykhina Vlada

こんにちは、ポルトリーヒナ・ヴラーダです。今年の「日ロ」は私の初めてのホームステイの経験になりました。最初、これは深刻で、あまり楽しくないイベントだと思っていましたが、結果は予想を上回りました。この十日はとても楽しかった!多くのノヴォシビルスクの場所に行きましたが、実は、この場所について全然知りませんでした。皆さんがプログラムを楽しんだことを願っています。皆さんに”ありがとう”と言ってあげたい。来年ぜひ会いましょう!

Serova Ekaterina

今年は初めて日露に参加しました。そして、参加するように決めたことは本当によかったです。日本人も他のロシア人も最高でした。

プログラムは私にも面白かったです。ノヴォシビルスクに住んでいる私さえも行ったことがない場所を訪問しました。レーザータグや馬に自由に乗れる村やアンチカフェは始めてでした。その上、アイススケートが前は全然できませんでしたが少しできるようになりました。

ゲストの日本人たちはみんな異なる人だったけど、みんな頭がいいし、明るいいし、面白い人でした。ホームステイに来てくれた細谷日乃花さんはとても明るくて、とても喋りやすい人です。ロシアやソ連の文化にすごく興味があって、しゃべる話題が本当にいっぱいありました。そして、私と同じでカチューシャなどのロシアの歌が好きで、一緒によく歌って最高の時間を過ごしました。

今年の日露で作った新しい友達と今でも連絡を続けています。会えてよかったです。

これから、来年を楽しみにしています！

Krivhy Valentina

今年の夏に日露のプログラムで日本人がきました。私のところにゲストが泊まりました。彼女の名前は藤田梨佳子です。彼女はとても楽しくてすばらしいです。私たちはよい日々を送りました。一緒に遊園地へ行きました。遊園地はとても好きでした。私は梨佳子ちゃんに家族と会ってもらいました。家族が好きでした。お母さんは色々なロシアの料理をご馳走しました。梨佳子ちゃんは「楽しかったよ」と言いました。また、その時に梨佳子ちゃんにピロシキーを作ってあげました。ロシアの料理の中で一番好きなのはボルシチだと言いました。日露では遠足を行いました。遠足の時に私達はいろいろなノヴォシビルスクの史跡を見ました。そして、きれいな博物館へ行きました。一番好きな博物館はベリアル博物館でした。それはいい経験でした。楽しかったです。



Agafonov Timofei

Привет! Я Тимофей. О Ничиро я узнал за 11 месяцев до начала программы и не смотря на долгое ожидание энтузиазма у меня не убавилось совсем:). Опыта участия в подобных программах у меня не было.

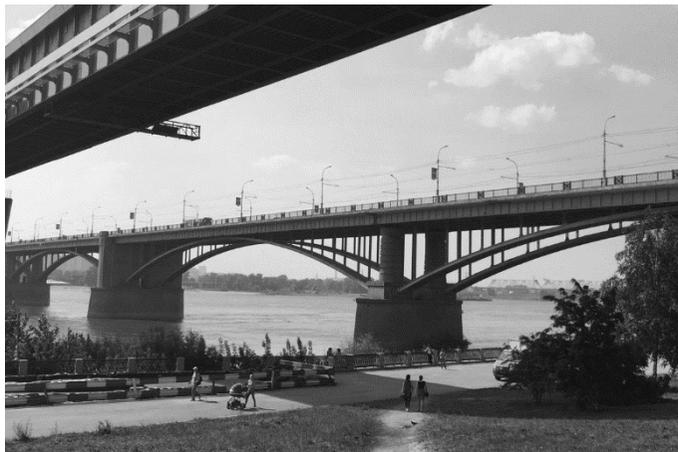
Было очень волнительно быть принимающей стороной для иностранцев, законы, визы, и прочие юридические тонкости пугали, но, ничего не может омрачить Ничиро - 2016! Вместе с Ангелиной я попытался выложиться на все 100% и предоставить все условия, чтобы моим новым друзьям всё супер понравилось. И как же было приятно, когда я увидел результаты, отдачу от ребят, которые чувствовали себя уверенно, раскрепощено. Уверен наше ничиро-2016 было одним из лучших и интересных только благодаря той команде, которая этим занималась! Только полная отдача каждого, кто был задействован дала результат. Спасибо ребятам).

Очень рад, что к нам приехали очень весёлые и целеустремлённые ребята. Я обрёл новых друзей, и это главное). Жду поездки в Японию следующим летом, чтобы обязательно с ними встретиться).

こんにちは！ティモフェイです。日露についてはプログラムの始まる11か月前に知りました。長く待ちましたが、熱意が冷めることは全くありませんでした。また、同じようなプログラムに参加した経験はありませんでした。

法律、ビザ、法的な細かなことが怖くて外国人の受け入れ側であることがとても不安でしたが、2016年の日露を暗くするものは何もありませんでした。アンゲリーナと一緒に100%の全力を尽くして全ての条件を提供し、新たな友人たちがあらゆることに満足できるよう努めました。明らかにリラックスしている皆の姿を見たときはとても嬉しかったです。2016年の日露に関わったチームのお陰で、このプログラムは最も良く興味深いものの1つになったと確信しています。このプログラムに関わった人達が全力を尽くしたことでこの結果を生みました。みんなありがとう！

とても嬉しいことに、非常に陽気で明確な目的を持った友人達が私たちのところに来ました。私は新たな友人を見つけることができましたが、これは重要なことです。彼らと会うために来年の夏に日本へ行くことが待ち遠しいです。



Builuk Maria

During the ten days we hosted our guests from Japan, I got a huge new experience and a lot of pleasure from spending time with our new friends. That was my first time to take part in such events as Nichiro, and, of course, I was nervous enough before meeting our guests. Fortunately, all of them turned out to be absolutely cool and adorable people, so after a day or two we became able to communicate quite well, even with our Japanese and Russian languages, which were not perfect at all.

Every day of the Nichiro was full of great impressions and now I believe that we all have warm memories from the event. A lot of presents we exchanged, photos we took, stories of our lives and traditions of our countries we told each other about, places we saw, food we tasted all together — everything was so marvelous the memory of the experience is still incredibly vivid and will remain so for all the year before a new Nichiro.

Now I'm very grateful for those people who got me involved in this event, who were supportive and friendly, even though we met for the first time in our lives just the day before our guests' arrival. Also I want to thank our Japanese friends for being so open for Russian culture, so interested in everything surrounding them. When we were saying our farewells, most of us crying, everyone regretted we had only ten days to spend together.

The Nichiro was nothing like I expected it to be. All the event was like a meeting of young, curious and cheerful people from two totally different countries, who were enjoying each other's company, roaming around the city, experiencing ice-skating and horse riding, Russian traditions in countryside on a family day, travelling to another old Russian town, returning home every night exhausted, yet happy and satisfied with ourselves.

When I see my Japanese friends from the Nichiro posting some photos on Instagram or Facebook (no matter from the event or just something about their daily life), when I see it, it makes me smile, being aware that somewhere in the huge world these people are living, sharing my precious memories of the ten summer days. I really think that everyone being a student studying a foreign language and culture should take part in such event; even if something goes wrong from time to time, in the end you'll have a great amount of good emotions and memories.

私達は10日間日本から来たゲストを泊めました。その間新しい友人たちと時を共にすることで多くの新しい体験、そして喜びを得ることができました。日露のようなイベントに参加するのは初めてだったので、ゲストの日本人に会うまでは不安でした。幸いにも、彼らは皆素敵で魅力的だと分かったので、拙い日本語やロシア語でしたが1~2日でよくコミュニケーションがとれるようになりました。

日露での毎日は素晴らしい感動に満ちていて、私は皆がこのイベントで素敵な思い出ができたと思っています。交換し合った沢山の贈り物、撮った写真、お互いに話し合った自分の国の生活や伝統の話、訪れた場所、共に味わった食事—すべてが素晴らしかったです。この経験の記憶は驚くほど鮮やかで、ずっと忘れられないでしょう。

今、私をこの企画に参加させてくれた人達にとっても感謝しています。彼らとはゲストの到着のほんの数日前に初めて会ったにも関わらずとても協力的かつ友好的だったからです。また、ロシアの文化に通じている日本人の友人にも感謝したいです。なぜなら、彼らに囲まれたすべてのことが面白かったからです。別れを告げると

きには、ほとんどの人が涙を流して共に過ごした 10 日間を懐かしく思っていました。

日露は私が思っていたものとは違いました。全ての企画が 2 つの異なる国から集まった、若く、好奇心があつて活発な人々の集まりのようでした。お互いの付き合いを楽しみ、街を散策し、アイススケートや乗馬を体験し、ファミリーデーには郊外でロシアの伝統を味わい、他のロシアの街へ旅行し、毎日家に帰る頃には疲れていましたが、お互いに幸せで、満足していました。

日露から来た日本の友人が Instagram や Facebook に日々の他愛のない写真を投稿しているのを見て、私は笑顔になります。そして広い世界のどこかに彼らはいて、夏のかげがえのない思い出を共有していることに気付くのです。外国の言葉や文化を勉強している学生は皆このようなイベントに参加するべきだと強く思います。その間に何か間違った方向に進んでしまったとしても、最後には沢山の良い感動と思い出を抱くことになるでしょう。



補足 関西本部の活動

関西本部について

日露学生交流会関西本部は、関西圏のロシア語を勉強している学生、ロシアに興味のある学生を中心に活動しているインターカレッジサークルである。また、日本語を勉強しているロシア人学生、日本に関心のあるロシア人学生を中心としたロシア側の日露学生交流会も、リャザンとノヴォシビルスクの両都市に存在している。日露学生交流会関西はそれぞれの会と協定を結んでおり、毎年学生を派遣・受け入れしあいながら交流を深めている。資金運営や基金請求、ロシア人の招へいビザ等の全活動・組織運営を学生のみで行っていることも当会の特徴として挙げることができる。

主たる活動は上記の夏季休業を利用した訪露・訪日活動であるが、冬季にはNHK解説委員の石川一洋氏をお招きしての講習会や、日露関西主体の勉強会を開催するなど、学生の本分と言える勉学の面でも充実した活動を続けている。

●会員名簿

氏名	役職	大学名	学年
稗田杏梨	代表	大阪大学	3年
佐藤瞭	総務	大阪大学	2年
井上裕貴	総務	大阪大学	3年
岡崎悠	財務	大阪大学	2年
壇上直之	財務	神戸大学	2年
星島遙太郎	渉外	大阪大学	3年
島谷和樹	企画	大阪大学	3年
矢野百合愛	企画	同志社大学	3年
佐野悠斗	企画	大阪大学	2年
田中真奈美	企画	大阪大学	1年
中村園子	企画	同志社大学	1年
菅原天啓	広報	大阪大学	2年
桂元東	広報	大阪大学	3年
藤村華音	広報	大阪大学	1年

訪日企画

企画概要

企画名	関西本部主催訪日企画
主催	日本ロシア学生交流会 関西本部
共催	日本ロシア学生交流会 ノヴォシビルスク支部
実施期間	2016年8月9日～8月18日

主な企画内容

●ホームステイ

ロシア人の訪日メンバーは日本人学生の家にホームステイすることとなった。今回が初の訪日というメンバーも多く、日本の生活を肌を感じる事ができただろう。また受け入れ先の学生もロシア人と日常を共有することで、生活様式に対する新たな発見があったのではないだろうか。

●ディスカッション

今回の訪日では、ディスカッションの日として日程を一日設けた。スポーツやアニメなどのテーマに基づき、日露側双方が自国での現状や見解を述べあった。独学ではなかなか見えてこない双方の生の姿の相互理解に迫られた。

●都市散策・交流企画

伝統と歴史の香る京都、奈良に加え、観光地である大阪道頓堀や神戸を巡った。日本の伝統的な顔や近代的な顔といった日本の多彩な面を紹介することができた。

加えて、日を追って交流を重ねるうちに相互理解、親睦を深めることができた。日本人同士が話すことも多かった初日に比べ、企画が進むにつれロシア人と日本人とのスムーズな交流の輪が築け、企画全体も有意義なものになった。

●報告書の発行

様々な企画の内容や日露間の学生交流を通して得たものをまとめ、本会の活動意義について報告するため、報告書を編纂している。

プログラム日程

8月 9日 (火)	16:00	関西空港第一ターミナル国際線搭乗口集合
	23:15	ロシア人メンバー到着 出迎え
10日 (水)	13:00	川西能勢口駅集合
	14:00	ウェルカムパーティー
	16:00	解散
11日 (木)	14:00	近鉄奈良駅集合
	14:30	奈良公園、東大寺散策
	18:00	解散
12日 (金)		フリーデー USJ グループと大阪市内観光グループに分かれて1日を過ごす
13日 (土)	12:30	阪急箕面駅集合
	13:30	日本文化体験(抹茶、折り紙)
	15:30	ディスカッション
	17:00	解散
14日 (日)	11:00	JR 元町駅集合
	11:30	神戸観光
	17:00	解散
15日 (月)	10:00	大阪公園駅集合
	11:00	大阪城見学
	14:30	道頓堀散策
	15:00	解散
16日 (火)		ファミリーデー
17日 (水)	10:30	阪急嵐山駅集合
	11:00	嵐山散策
	13:30	金閣寺散策
	15:30	解散
18日 (木)	16:00	千里中央駅集合
	16:30	フェアウェルパーティー
	18:00	解散
	20:30	ロシア人見送り
19日 (金)		ロシア人メンバー 日本出国

訪露企画

企画概要

企画名	関西本部主催訪露企画
主催	日本ロシア学生交流会 関西本部
共催	日本ロシア学生交流会 リヤザン支部
実施期間	2016年8月19日～8月28日

主な企画内容

●ホームステイ

日本人の訪露メンバーはロシア人メンバーの家にホームステイすることとなった。今回が初の訪露というメンバーも多く、ロシアの生活を肌を感じることに貴重な機会ができた。今回、日本人メンバーの受け入れに当たってくださったロシア人メンバーやご家族に心からの感謝を申し上げたい。

●都市散策・交流企画

リヤザンに加え、観光地であるモスクワを巡った。ロシアの伝統的な顔や近代的な顔といった多彩な面を感じるいい機会になった。

加えて、日を追って交流を重ねるうちに相互理解、親睦を深めることができた。日本人同士の話すことも多かった初日に比べ、企画が進むにつれロシア人と日本人とのスムーズな交流の輪が築け、企画全体も有意義なものになった。

●報告書の発行

様々な企画の内容や日露間の学生交流を通して得たものをまとめ、本会の活動意義について報告するため、報告書を編纂している。

プログラム日程

8月 19日 (金)	17:30	日本人メンバー モスクワ、シェレメチエボ空港着
	18:30	バス乗車
	24:00	リヤザン着、ステイ先へ移動
20日 (土)	13:00	シャシリクパーティー
	18:00	解散
21日 (日)	12:00	クレムリン広場前集合、散策
	18:00	ウェルカムパーティー
	20:00	解散
22日 (月)	11:00	リヤザン国立大学にてプレゼンテーション
	14:00	昼食
	16:00	解散
23日 (火)	9:00	集合、バス移動
	10:30	コンスタンティノバ 博物館見学
	14:00	昼食
	15:00	修道院散策
	18:00	バス移動
	19:30	解散
24日 (水)	10:00	パブロフ博物館集合、見学
	14:30	昼食
	15:00	お菓子の家到着、クッキーのアイシング体験
	18:00	解散
25日 (木)	7:00	リヤザン駅集合
	10:30	モスクワ着、レーニン廟、聖ワシリー寺院、 Gumなどの散策
	14:00	昼食
	16:00	ツァリーツィノ公園到着
	19:00	バス移動
	23:00	リヤザン着、解散
26日 (金)		ファミリーデー
27日 (土)	18:00	フェアウェルパーティー
	21:00	解散
28日 (日)	10:00	リヤザン出発
	14:00	モスクワ着
	18:00	日本人メンバー ロシア出国
29日 (月)		日本人メンバー 成田空港着

第 29 期日本ロシア学生交流会 関東本部報告書

2016 年 11 月発行

編集 日本ロシア学生交流会 関東本部 広報部

幹事長 中山義裕

発行 日本ロシア学生交流会 関東本部

Email: staff@nichiro.info

<http://www.nichiro.info/>